

タイトル	アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』：翻訳・註解（その7）
著者	安酸，敏眞；YASUKATA, Toshimasa
引用	北海学園大学人文論集(56)：119-189
発行日	2014-03-31

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
— 翻訳・注解（その7） —

安 酸 敏 眞

III. 個人的批判 (Individualkritik)

§ 35. 個人的批判は次のことを調べる必要がある。1) ある書物の個人的性格が著者と推測されている人物の個人的性格にふさわしいか、あるいはふさわしくないか。2) もし不調和が見出されれば、この不調和はいかにすれば除去され得るであろうか。3) 何が原初的なものであるのか。それにもかかわらず、後者の2つの課題はここで1つに落ち合う。というのは、あらゆる文字作品は著者の個性によって作られるので、それは原初的に所与の個別的条件と完全に一致しているほかはない。それゆえ、もしある書物が仮定されている著者の個性にふさわしくなければ、その書物は損傷されたか、別の著者に由来するものか、あるいは両方が同時に起こったのか、そのいずれかである。それゆえ、書物の真正の形と実際の著者が確定されることによってのみ、このような不調和は止揚されることができる。そのようにして見出されたふさわしい状況は、同時に原初的な状況である。そこからして、ひとが個人的批判を本物と偽物との批判として表示してきたことが、把握され得る。だが、爾余の種類批判もまた真正なるものを、すなわち原初的なものを突きとめるべきだということを別にして、このような呼称は容易に間違った見解へと誘導する。すなわち、個人的批判は書物の真正性に関して疑念が存在するところでのみ適用されるべきである、という見解がそれである。しかし個人的批判はむしろ、そこからかなり多くの場合において疑念と、したがって先ほど言及した第3の問題とが、

生じてくるしかないような、絶え間なく用られるべき操作である。それにまた、これに関して真正なるものの概念は決して単純なものではない。プラトンの著作として伝承されているある書物は、こうした関係では偽物と説明され得るが、しかしその際、それはクセノポーンの本物の著作であり得る。ひとは個人的批判を「高等」批判としても表示してきており、その際「下等」批判ということでは、文法的批判と古文書学的批判、つまりいかなる学問的価値も持たない見分け作業を理解している。

1. 第1の課題の解決は個人的解釈からおのずと生じてこざるを得ない。実際のそして確実な著者の個性は、まず解釈学的な道を辿って書物そのものから見出される。このなかの何かあるものがそれと一致しないとすれば、ひとはさしあたりみずから自身の解釈を厳密な批判に服させなければならない。というのは、ひとは著者の性格を著作の個別的事項から規定しなければならないので、ここにおいて多くの特徴が十分に顧慮されずに、つぎにそれが早まって仮定された著者の性格からの逸脱のように思われる、という事態が発生することがある。しかしもしある箇所と著者のそれ以外の文体との間に真の不調和が存在するとしても、この不調和は原初的に存在していたということもあり得る。というのは、いかなる個性も一定の限界内で可変的だからである(原著126, 185頁を見よ)。もし不調和がこのような仕方でも説明され得ないとすれば、ひとはそれが伝承の腐敗に根拠を持っているかどうかを、さらに調べるであろう。ここにおいて古文書学的批判が個人的批判の必要なる補助手段であることが示される(原著188頁を見よ)。しかし同時に、もし個性についての見解が、その見解の基準にしたがってふたたび検査されるべき異文に基づいて確定されているとすれば、証明の遂行が知らぬ間に循環運動をする危険性がふたたび迫る(原著206頁を見よ)。それゆえ、個人的批判と解釈はただ近似的に、つまり絶えざる絡み合いによって、その課題を解決することができる。

さて、ある文字作品がある前提された著者に、あるいは伝承によって申し立てられた著者にふさわしいかどうかは、その著者の個性がほかで知られているときにのみ、明らかに決定され得る。ひとはその場合比較によっ

て、この著者の個性が書物そのものから突きとめられた実際の著者の性格と同一であるかどうかを確定しなければならない。ひとが推測された著者を別の書物から知っているとき、この課題は最も確実に解決される。もちろん、これらの書物もふたたびまたまずはその真正性が検査されなければならず、それによって手続き全体はきわめて錯綜したものになる。例えば、ある対話がプラトンの文体に対応しているかどうかを決定するためには、ひとはプラトンの個性を他のいろいろな対話から知らなければならない。しかし他のいろいろな対話については、ふたたびあらゆる個々のものが同様の仕方では検査されなければならない。明らかにひとはここで1つのものから他のものへと赴くよう命じられるが、他方であらゆる個々のものにおいて懐疑が繰り返される。こうした懐疑は次のようにしてのみ解決される。すなわち、二三の対話において伝承が外的証言によって確実に認証されており、そしてそれによって他の伝承の適切性が決定できるためには、これらのなかに著者の個性が十分に表現されることによってである。

さてしかし、個々の書物の内部においてよりもはるかに高い度合いにおいて、同一の著者の複数の書物の間に、個性の統一性とうまく結合され得るにもかかわらず、容易に不調和と見なされ得る多様性が浮かび上がることがある。というのは、一人の著者のいろいろな著作は、それらがさまざまなジャンルに、あるいは著者の個性のさまざまな発展段階に属しているときに、区別されるからである。もしジャンルの性格と個人的なスタイルを取り違えると、批判はさしあたり道に迷う。例えば、われわれはリュシアースの個性をかなりの数の歴史的演説から知っている。だが、プラトンの『パイドロス』のなかには、彼によるエロースに関する演説も見出される¹。その演説の文体は爾余のそれからは非常に逸脱しているので、テイラー²以降、多くの人はそれが捏造されたものであると主張してきた。

¹ 「パイドロス」1C, 6A-10C『プラトン全集』第5巻、鈴木輝雄・藤沢令夫訳『饗宴・パイドロス』（岩波書店、1974年）、132、141-148頁参照。

² Thomas Taylor (1758-1835)。イギリスの学者。プラトン、アリストテレス、

これに関しては、その演説がその目的にしたがって特有の特徴を帯びざるを得ないということ、ひとは見落としてきた。もしそこにおいて、恋する人が自分を恋していない人たちを愛さなければならないという、逆説的命題が遂行されるとすれば、このことは些事にこだわる気取ったやり方でのみ起こることができる。ひとはそれゆえ、法廷弁論におけるリュースィアースの文体が簡素で無理のないものであるという理由で、この演説の真正性に異論を唱えることは許されない。すでにハリカルナッソスのディオニューシオス³が、エロースに関する演説におけるリュースィアースは、それ以外のところとは別の性格を示している、と述べている。彼の名前のもとに伝承されている墓碑銘もまた、ふたたび特殊な独自の文体をもっている。しかしこの文体は頌歌的なジャンルの形式から説明され得るので、ひとはその演説をこの文体ゆえに、ただちに偽物として退けてはならない。個人的批判はこれによれば明らかに種類の批判に依存している。しかしそれに加えて、とくに難しいのは、個性の発展が文体の形成に及ぼす影響を正しく評価することである。著作家は年を取るとしばしば若い頃とはまったく違った書き方をする。そして人生の運命に応じて、彼の個性のまったくさまざまな側面が際立ってくる。ひとは著作家の発展過程を必ずしも知っているとはかぎらないし、あるいは目の前にある書物がどのようにしてその発展過程のなかに位置づけられるかを、いつも知っているわけではない。それゆえ、もし1つの書物が推定されている著者の他の著作から本質的にも逸脱しているとしても、そうした逸脱が著者の発展過程のなかにその根拠を有している可能性³があるかぎり、逸脱しているという理由でそ

新プラトン主義者、ピュータゴラス主義者などの翻訳や注解に尽力し、ウィリアム・ベレイクや、超絶論者たちやイエイツなどに影響を与えた。

³ Dionysios Halikarnasseus, Διονύσιος Ἀλικαρνασσεύς (c.BC 60-AD 7 以降)。アウグストゥス時代のギリシア系歴史家・修辞学者。小アジアのハリカルナッソス市の出身。ローマに移住して文学・修辞学を教え、前5～前4世紀の古典期アッティカ散文を研究、洗練された鑑識眼で知られた。主著は『ローマ古代誌』 *Ῥωμαϊκὴ Ἀρχαιολογία*, [ラ] *Antiquitates Romanae*。

れに異論を唱える権利をもたない。ひとはこれについての判断を、歴史的な支点が欠如しているところでは、なかんずく同じジャンルの、他の著作家における類比的な事例から、形づくらなければならないであろう。しかし不調和が立ち現れてきたときに、まず不調和の度合いを確定し、つまりそれが著作全体の性格に存しているのか、それとも個別的事項のうちに存しているのかを調べることは、非常に重要である。おそらく異文の簡単な損傷があるだけでは、ひとは早まってその書物を偽物と見なさないであろう。例えばダウェシウス〔ダウェス〕⁴は、そのなかでは短い〔イオータ〕をもつ *Aiγyva* が現れるという理由で、『ピュティア祝勝歌』の最後の歌はピンドロスの作ではないと主張しようとした。もしこれが事実そうであるとしても、癩の種となっているものが文法的批判が古文書学的批判によって除去され得ないかどうか、まず調べられなければならないであろう。しかし実際にはそれどころか、それは韻律を理解しなかった批評家の無知に基づいているにすぎない。というのは、*Aiγyva* は頌歌においては決して短い〔イオータ〕とともに用いられないからである⁵。

以上に述べたことから、判断の確実さは書物の分量にも依存しており、これには比較的な批判が関係している、ということが判明する。前提されている著者について、確実な比較を行うことができるための十分な分量をもった書物が、1冊ないし複数冊存在しないときには、書物を判断するための基準が欠如していることが多い。しかしさらに、判断されるべき書物そのものが、分量的にあまりにも取るに足らず、個別比較のための支点をあまり提供しないこともあり得る。小さな文字作品やあるいは断片の場合には、それゆえしばしば、それらが1人の特定の著者に起因していないことが確定されるが、それに対して、著者の性格をきわめて正確に知っている場合ですら、それらが1人の著作家に必然性をもって帰せられるべき

⁴ [ラ] Ricardus Dawesius [英] Richard Dawes (1708-66)。イギリスの古典学者。主著は *Miscellanae critica* (1745)。

⁵ [原注] 『ピンドロス全集』、第1巻第2部、573頁参照。

かどうかは、はるかに稀にしか規定できない。キケローはセルウィス何某について言及している（『地縁・友人への書簡』IX, 16）。セルウィスはあらゆる所謂プラウトゥスの詩行に関して、「『この詩行はプラウトゥスのものではなく、これはプラウトゥスのものである』」（„Hic versus Plauti non est, hic est“）とすることができたが、「それは彼が詩人たちの文体を観察することと読書の習慣とによって、洗練された耳をもっていたからである」（quod tritas aures haberet notandis generibus poetarum et consuetudine legendi.）。しかしながら、ひとはそのような歴史的なものを「幾分の斟酌をもって」（cum grano salis）理解しなければならない。キケローはその箇所ですべて主として言及された判断の否定的な側面を強調している。この関係においては、例えばアレクサンドリアの批評家たちは異常に感情が細やかであった。これに対して、似たような類いの積極的判断は、非常に信頼できない。ヴィッテンバハはルーンケンを褒めたたえて言った（『ルーンケンの生涯』⁶ 220頁以下）。彼はストバエオスにおいても、あらゆる決定的に重要な箇所で、即座に著者の名前を挙げることができ、また詞華集のなかのいかなるエピグラムにおいても、たとえごくわずかのエピグラムしか残っていないような詩人の場合ですら、一回通読したあとで、いかなる著者に起因するのかを申し立てることができた、と。しかしこれは、芸当が追憶になったのでないかぎり、単純にミュンヒハウゼン⁷流のほらである⁸。偉大なヨーゼフ・スカリガー⁹ですら類似の要求によっていかに恥をさらし

⁶ Daniel Albert Wyttenbach, *Vita Davidis Ruhnkenii* (Leyden & Amsterdam: A. & J. Honkoop & P. den Hengst, 1799).

⁷ ミュンヒハウゼン (Karl Friedrich Hieronymus von Münchhausen, 1720-97) が書いた滑稽な冒険物語の主人公で、ほらふき男爵と呼ばれる。

⁸ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』 122-23頁参照。

⁹ Joseph Justus Scaliger (1540-1609)。オランダの宗教的指導者、学者。古典的な古代史をギリシアと古代ローマ史から、ペルシア、バビロニア、ユダヤ、

たかが知られている。というのは、彼はムレトゥスが彼をからかうために書き上げた詩行を、まったき確実性をもってトラベア¹⁰のものだと主張したからである（J・ベルナイス『ヨーゼフ・ユストス・スカリガー』¹¹、270-271頁）。より小さな書物や断片についての否定的な判断が問題となっている場合ですら、ひとは非常に慎重に物事を始めなければならない。そのような場合、臭覚の特別な繊細さを資料で裏づけたいとの過度の欲望がそえられることすらあるが、他方で非常に小さな作品においては、察知された不調和は間違った異文のなかにいとも容易にその根拠をもっているだけのこともある。フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフは繊細な批判的感情をもっていた。しかし彼は晩年になると事項や人物について否定的な意見を述べることを好んだ。かくして彼は、ベルリン図書館の写本のなかにあるキケローの1通の手紙を、印刷された版のなかには見出さなかったこともあり、若干の軽微な欠陥があるとの理由で、すり替えられた偽物と見なしたが、ついには彼の弟子の1人が、その手紙は通常の版の別の箇所にあるにすぎないということを、彼に示したのであった。当然のことながら、失われてしまった書物についての判断は通常最も難しい。もちろん、もしそれがいかなる性質であったか、そして仮定された著者の著作がそのような性質ではあり得なかったことがわかっているならば、そのような書物の非真正性を証明することは可能である。だが、これに対する証明は大抵不確かである。例えばティールシュ（『ミュンヘン文献学報』¹²第3巻、647頁）は、テュルタイオス¹³が古代に彼の名前で存在していた5巻の戦争歌を執

エジプトなどの歴史を含むものに拡大した。

¹⁰ Trabea (c.130)。ローマの喜劇詩人

¹¹ Jacob Bernays, *Joseph Justus Scaliger* (Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz, 1855).

¹² Friedrich Wilhelm von Thiersch, *Acta Philologorum Monacensium*, 4 Bde. (München: in Libraria regia scholarum, 1812-18).

¹³ Tyrtaios, Τυρταῖος（生没不詳）。前7世紀のギリシアのエレゲイオン（elegion, ἐλεγείον）調詩人。

筆したことに異を唱えた。なぜなら、テュルタイオスの時代にはまだ知られていなかったような抒情的韻律でそれが書かれたことを、彼が前提していたからである。しかしそれらはアナパイストス〔弱弱強(短短長)格〕であったし、アナパイストスで5巻の本を書くことができたことは、エレジー作者の類比がこれを証明している¹⁴。

文法的解釈、歴史的解釈、および個人的解釈において示されたことは、あらゆる著作において、そのなかで適用される語彙は、さらには素材と文章構成の仕方は、個人的に制約されているということである(原著101-102, 119以下、および127頁を見よ)。それゆえ、個人的批判もまたあらゆる著作のこれら3つの側面に関係する。

I. 素材あるいは内容が最も容易かつ最も確かな基準を提供する。素材あるいは内容が場所と時代に関して前提されている著者の個性にふさわしいかどうか、まず検査されるべきである。もし著者が、一般的にあるいはそう思われている時代に、いなかった場所にいたと言うとすれば、明らかに矛盾が存在するのであって、個人的批判はこれを解決する必要がある。さらに、ある作家の場合に、彼の時代のあとにあたる事態が言及されているか、あるいは前提されていることが見出されるか、それとも彼の時代の前に存在する出来事が、同時代的なものとして挙げられるとすれば、同様に明らかにそのような不調和が存在している。このようにアイスキネースの第4書簡では、アテーナイに設立されたピンダロスの像のことが記される。さて、アテーナイ人はコローン¹⁵に至るまで、ソローン¹⁶、ハルモディオス¹⁷とアリストゲイトーン¹⁸にのみ像を設置し、イソクラテースは「財

¹⁴ [原注]『ピンダロスの韻律について』*De Metris Pindari*, 130頁参照。

¹⁵ Konon, Κόνων (c.BC 444-BC 392)。アテーナイの名家出身の将軍。

¹⁶ Solon, Σόλων (c.BC 639-c.BC 559)。アテーナイの立法者。ギリシア7賢人の1人。

¹⁷ Harmodios, Ἀρμόδιος (?-c.BC 514)。アリストゲイトーンとともにペイシストラトス家の僭主政打倒を試みたアテーナイ市民。2人は恋人同士であった。

産交換について」(περὶ ἀντιδόσεως) の演説において、ピンダロスに示された敬意を物語る際に、その像について何も言及していないとすれば、問題の像はアイスキネースの時代にまだ存在しておらず、むしろずっとのちに設立されており、そしてその書簡はそれゆえにすり替えられた偽物であることが証明される¹⁹。ソクラテスのクセノポーン宛の書簡において（『ソクラテスとソクラテス派、ピュータゴラスとピュータゴラス派のもの」と称されている書簡²⁰7頁）、クセノポーンはソクラテスの死後はじめてそこに住居を構えたのに、ペロポネネーソス半島に住んでいることが前提されるとすれば、それは似たような矛盾である。しかしながら、時代の情報に基づいて書物の真正性について有罪判決を下すためには、ひとはしばしば、とくに古文書学的批判の助けを借りてでも、年代順を個別事項の細部にいたるまで確定しなければならない。そして癩の種となっているものに関しては、意図的な時代錯誤やあるいは記憶間違いが存在するかどうか、まず検査しなければならない（原著 208 頁参照）。

場所と時代のほかに、書物の歴史的基礎を形づくっている爾余の状況や事態が、考察の対象となる。例えば、演説のなかに、あるいは法律のなかにすら、同時代の出来事や政治的制度の無知が浮かび上がるとすれば、前提されている著者や法律制定者において、そのような無知が仮定されてよいかどうかの問題である。この関係において際立つ多様な矛盾のために、デーモステネースの演説のなかに挿入された布告の多くは棄却されるべきである。マネトーン²¹のものだとされる書簡において、国王プトレマイオ

¹⁸ Aristogeiton, Ἀριστογείτων (?-c.BC 514)。ハルモディオスとともにペイシストラトス家の僭主政打倒を試みたアテーナイ市民。

¹⁹ [原注] 『ピンダロス全集』第2巻第2部、18-19頁参照。

²⁰ *Socratis et socraticorum, Pythagorae et Pythagoreorum quae feruntur Epistolae*, herausgegeben von Johann Conrad von Orelli (Leipzig: Weidmann, 1815).

²¹ Manethon, Μανεθών (生没不詳)。エジプトのヘーリオポリスの神官・学者。プトレマイオス2世の治世 (BC 285-BC 246) にギリシア語でエジプトの歴

ス・ピラデルポス²²は尊厳者 (Σεβαστός) と呼ばれている。しかしこれはローマの称号アウグストゥス (Augustus) の翻訳であるので、この点でただちにこの作品の非真正性が示される²³。バラリス²⁴とソクラテス派の書簡は、場所、時代、および歴史的事態に関する不調和のゆえに、ベントリーによって本物でないと言明されている。似たような理由で、プラトンの書簡も本物ではないと見なされるべきである²⁵。しかし書物の内容は一般に著作家が属している国民の性格や歴史的状況とは矛盾していることがある。かくして、アレクサンドリアでたびたび起こったように、ユダヤ人がユダヤの素材を古代のギリシア著作家にこっそり押しつけるとき、ひとはそれを容易に認識できる。例えば、アブデーラのヘカタイオス²⁶がアレクサンドロス大王の行軍に付き従ったと、ユダヤの歴史は書き記しているが、このことは疑われるべきではない。しかしながら、それに付随するアブラハムとエジプトに関する書物が本物ではなかったということは、保存されているいろいろな断片が示している²⁷。しかし似たような癪の種となって

史 Aigyptiaka, Αἰγυπτιακά を執筆した。

²² Ptolemaios Philadelphos, Πτολεμαῖος Φιλάδελφος (BC 308-BC 246; 在位 BC 285-BC 246)。プトレマイオス 2 世。プトレマイオス 1 世 (プトレマイオス・ソーテル) の息子。アレクサンドリアにパロス島大燈台を建設、ムーセイオンと大図書館を拡張・整備し、学芸を保護・奨励して著名な学者を多く輩出させた。

²³ [原注] 「マネトーンとシリウスの時代」(1845) 15 頁参照。

²⁴ Phalaris, Φάλαρις (生没不詳)。前 6 世紀中葉に活躍。シケリアー島の僭主。

²⁵ [原注] 綱領「プラトンとクセノポーンの間には存在したと言われる敵愾心について」De similitudine, quae inter Platonem et Xenophontem intercessisse fertur (1811) (『小品集』第 4 巻, 29-30 頁, 第 7 巻, 38 頁) 参照。

²⁶ Hekataios ho Abderites, Ἑκαταῖος ὁ Ἀβδηριτῆς (c.BC 360-c.BC 285)。前 315~前 285 頃に活躍した歴史家・著作家。トラケー (トラキアー) のアブデーラ、もしくはテオース島の出身。懷疑主義哲学者ピュッローンの弟子。

²⁷ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス, ソポクレース,

いるものにおいて、著者が異質の伝承にしたがっていないかどうか、しばしば検査されるべきである。最後に、基準もまた前提されている著者の思想体系のうちに存している。1つの箇所が別のところで表明されている見解や原則に矛盾しているとしても、これはまだそれを本物でないと声明するための十分な根拠では断じてない。矛盾は著者のいい加減さ、物忘れ、あるいは意図のなかにすらその原因をもっていることがある（原著 119 頁を見よ）。個人的批判はそれゆえ、いずれの場合にも、そのような原因が前提されるべきかどうかを、検査する必要がある。しかしとりわけここでは、見かけによって欺かれていないかどうか用心する必要がある。なぜなら、一切は完全に調和しているところで、ひとはしばしば不完全な解釈によって矛盾を見つけるからである。かくしてプラトンは『パイドン』のなかで、霊魂が調和であることを論難しているが、一方『ティーマイオス』のなかでは、個々の霊魂に類似的である世界霊魂を調和として構想している。このことは矛盾しているように思われる。だが、より厳密な解釈は、『パイドン』においては、霊魂が物的な調和であるという見解のみが論難されていることを示す。その場合、ソクラテスがシミアース²⁸に、自分はおそらく調和を、それに譬える当のものに、つまり霊魂に、似ているものと呼んではない、と述べる時、彼はそれによって次のことを暗示している。すなわち、物質的な調和自体はそれの模倣にすぎないような、そのような高次の、超感覚的な調和というものがもちろん存在し、そしてこの意味においてつぎに『ティーマイオス』において、霊魂が調和として叙述されるということである。プラトンは早まった批判によって非常に被害を被ってきたが、そのような早まった批判は、不完全な解釈のせいで辻褄が合わないものを矛盾的と見なすのである。けれども、シェリングでさえかつてそ

エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、146 頁以下参照。

²⁸ Simias, Σιμίᾱς（生没不詳）。テーバイの人。ソクラテスに親しいサークルに属する 1 人で、ソクラテスの刑死にも立ち会った。

のような矛盾とされているもののせいで、実際に『ティーマイオス』の真正性を疑ったことがある²⁹。著者とされている人物の知られている原則に関して実際に矛盾があるために、ある書物が批判を受けているような事例を、デーモステネースのピリッポス弾劾演説第4弾は提供する。そこにおいて(141頁)、デーモステネースがそれ以外のところで首尾一貫して論難しているテオーリコン³⁰が擁護される³¹。著作家の原則はときには学派ないし党派に遡源されるべきである。とはいえその場合には、その著作家が与えられた事例において、彼の同時代人たちの一般的見解から個人的な仕方では逸脱していないかどうか、つねに検査されるべきである。それにまた、ひとはこの普遍的な見解をしばしば、それにしたがって批判すべき資料からのみ知っている。それゆえ、ひとは原理の請求(*petitio principii*)に用心しなければならない。特別な困難が生じるのは、その個性にしたがえば他人の書いたものを寄せ集めて書く人ではあり得ないようなある著作家が、他人の思想の内容を自分自身のものとして提供していると思われるときである。その場合、当該箇所真正性を、あるいは書物全体の真正性

²⁹ [原注]「プラトンのティーマイオスにおける世界靈魂の形成について」*Ueber die Bildung der Weltseele im Timaeos des Platon* (1807) (『小品集』第3巻, 125-126, 164頁) 参照。

³⁰ テオーリコン (*θεωρικόν*) とは, *A Greek-English Lexicon* [compiled by Henry George Liddle and Rober Scott, revised by Henry Stuart Jones and Roderick McKenzie, with a Supplement 1968 (Oxford: Clarendon Press, 1990)] の説明によれば, “fund for providing free seats at public spectacles” のこと。アリストテレスの『アテーナイ人の国制』のなかには, *οἱ ἐπι τὸ θεωρικόν* なる表現が見出されるが (Arist. *Ath.* 43.1), 村川堅太郎氏はこれに「祭祀財務官」という訳語を充て, 次のような注釈を加えている。この職責は「4世紀に創始され, 本来は祭祀における観劇手当 (*θεωρικόν*) の分配を司った。Eubulos がこの役人の1人となり, 国家財政を指導するに及び重要官職となり, その管掌は国家の全財産に及んだ。」『アリストテレス全集』第17巻 (岩波書店, 1972年), 404-405頁参照。

³¹ [原注]『アテーナイ人の国家財政』, 第1巻, 307頁参照。

をすら疑う権利を行使する前に、これについて実際に個人的な根拠があるかどうかを、ひとはまず厳密に検査しなければならない。例えば、プラトンのと称される『イオン』は、その思想の内容にしたがえば、幾重にもクセノポーンの饗宴と一致している。ここでは実際クセノポーンが間違っ
て剽窃の罪を帰されることだってあり得るであろう。しかしプラトンに改作能力があるとも信じられないので、『イオン』の真正性に対する疑いは正当化されるように思われる³²。

II. 著作家の個性は彼の文章構成の仕方（Compositionsweise）から解釈学的に見出される。それゆえ、この文章構成の仕方と一致しないものは、著作家の個性と矛盾している。もちろん、これについての判断は解釈的な帰納的推理の完全性にまったく依存しており、それゆえ内容の性質から導出されるものよりも難しい。アリストパネスは『蛙』のなかで（第5巻1208以下）それを嘲笑しているが、彼が自分の作品の前に一種のプロローグ（前口上）を先送りするのは、例えばエウリーピデースの流儀に属する。しかし『アウリスのイーピゲネイア』にはプロローグがなく、そして当面の文章構成においてプロローグをもつことができなかったということは、作品そのものから証明され得る。なぜなら、その作品の内容を形づく
らざるを得なかったものが、第5巻49-114で語られているからである³³。しかしながら、ここからこの悲劇が本物ではないとただちに結論づけることは許されない。詩人がそこにおいて一度だけ何らかの理由で彼のそれ以外の流儀から逸脱したということだって、実際考えられるだろうから。文章構成における個々の点が判断にとって決定的であることは稀であ

³² [原注]「プラトンとクセノポーンの間には存在したと言われる敵愾心について」De similitudine, quae inter Platonem et Xenophontem intercessisse feruntur（『小品集』第4巻, 18頁, 注4）参照。

³³ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』, 216-217頁参照。

る。例えばプラトンにおいては、個々の対話の文章構成における最大の多様性が示されるので、ひとはすべての疑いなく真正である対話のなかに見出される特徴をも、必ずしも彼の文体のまったく必然的な契機と見なすことは許されない。しかしわれわれは、彼の書物の本質的な性格全体を確定することができるし、また書き方の個々の契機の批判的意義を測る本来的基準が、つねにこのなか存在する。それゆえ、プラトンに帰せられる複数の対話において、個人的批判は完全に確実な出来事に到達する。例えば、『ミーノース』と『ヒッパルコス』はプラトンの文体のあらゆる規則と明らかな矛盾関係にある。このことはまず二つの対話の構想全体のうちに示される。そこにおいて演劇の形式が取り扱われる仕方は、ソクラテスと論争する人物たちが演劇的性格を欠いており、またそれに対応して名前すらを欠いているので、まったく非プラトンのである。というのは、これらの人物がミーノースやヒッパルコスという名前でないことは、結合的な批判によって容易に示されるからである³⁴。プラトンがそのなかではっきりした名前をもたない人物を導入する唯一の対話は『法律』であるが、そこではクレイニアスとメギロスという名前が、すでにプラトンのそれ以外の慣習に反して作り出されているように思われ、そしてアテーナイの客人たちは名前で呼ばれていない。だが、このことはソクラテスもそこに登場しない、この対話の特徴から説明がつく。アテーナイの客人の姿で、プラトンは自分自身の見解を表明し、そして3人の対話者は一定の性格を有している³⁵。ミーノースとヒッパルコスという目下の表題は、疑いなく後代の文法家に起因している。もともとそれらは「法律について」(περί νομου)と「利得について」(περί φιλοκερδούς)と言われていた。正真正銘プラトンの対話に由来するものは2つだけである。つまり、『国家』と『法律』は実質的な内容にしたがって名づけられている。にもかかわらず、これらにおいて

³⁴ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』、7-10頁。

³⁵ [原注] 同上、69頁以下。

はすでに表題の形式——「国家について」（περί πολιτείας）および『法律について』（περί νόμων）ではなく、「国家」（Πολιτεία）と「法律」（Νόμοι）——が、それらにおいては対象について議論されるだけでなく、対象そのものがドラマティックに発展させられる、ということを暗示している³⁶。さてしかし、もしひとが表題にしたがって『ミーノース』と『ヒッパルコス』の内的構想により深く入り込むと、素材の取り扱いのいたるところにおいて、たとえ目的はしばしば意図的に隠されているとしても、プラトンのすべての真正な対話において支配しているところの、深い合目的性が欠如していることが見出される³⁷。さらに思想の結合に関しては、2つの対話にはすべての真正な対話から知られているプラトンの弁証法の痕跡がない³⁸。最後に、それらは外的形式においてプラトンの書き方からまったく本質的に逸脱している。ひとはこのことを最も微細な個別の事項に至るまで追跡することができるが、そこでは最終的にももちろん感情だけが決定する³⁹。しかしこれらの対話においては、さらに別の基準が付け加わる。それらは同時にプラトンの本物の著作とあまりに大きな一致を示している。疑いなくプラトンの本物の著作のいろいろな箇所が模倣される、しかもしばしば表面的な、あるいは誤解されやすい把握を伴ってすら⁴⁰。プラトンがそのような仕方のみずから他人の書いたものを寄せ集めて書いたということは仮定できないので、これらの対話は疑いなくすり替えられたものである。ひとは一般的に次のように言うことができる。すなわち、ある著作と著者の真正な書物とのあまりにも大きな類似性は、しばしば大きな逸脱よりも非真正性に対するより強度の証明である、と。というのは、独創的

³⁶ 〔原注〕 同上，10頁。

³⁷ 〔原注〕『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』，11頁。

³⁸ 〔原注〕 同上，12頁以下。

³⁹ 〔原注〕 同上，15頁以下。

⁴⁰ 〔原注〕 同上，23頁以下。

な著作家は自分自身の文体形式を、奴隷のように卑屈なやり方で模倣したりはしないからである。最上の著作家においてすら起こり得る偶然的なあるいは意識的な、同一の思想あるいは同一の言い回しの反復を、模倣から区別することは、しばしば容易ではない。そのような反復はエウリーピデースにおいて頻繁に見出される。例えば、古代の演説家たちもまったく躊躇わずに、自分自身の古い演説から全文を文字通り反復したが、その理由は繰り返される対象に対して、前とは違った表現を追求する時間もその気もなかったからである。しかし著作家が他人の書物を模倣した可能性があるかどうかを、決定することが問題である場合には、とくに慎重に処理しなければならない。目の前にある一致に関しては、それが偶然ではないのか、あるいは共通のジャンルの性格に根拠づけられているのかを、つねにまずもって検査すべきである。オランダの批評家たちは、たしかに年代順には模倣が不可能なところで、ときおり早まって模倣を前提してきた⁴¹。しかしさらに、まったく古典的な著作家においても実際の模倣が見出される。悲劇作家たちはとくに効果的な箇所を、それどころか詩行を、他人の劇から借用することは稀ではなかった。というのは、このことはまさに観衆の趣味にしたがっていたからである⁴²。そのような仕方ではソポクレスはアイスキュロスを、エウリーピデースはソポクレスとアイスキュロスをたびたび模倣している。当然のことながら、演説家たちにおける借用も同様であった。平和についてのアンドキデース⁴³の演説は、すでに古代後

⁴¹ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』、23-24頁、および『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』251-252頁参照。

⁴² [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』242頁以下。

⁴³ Andokides, Ἀνδοκίδης (BC 440-BC 390)。古代ギリシアのアッティカ十大雄弁家の1人。

期において本物ではないと見なされていたが、それはそのなかのかなり長い箇所がアイスキネースの演説「使節団の背任について」（περί παραπροσβείας）と一致しているからである。しかしアイスキネースはアンドキデースを単純に抜き書きしたのであり、これは50年前に行われた演説なら何の障害もなくできたことである。演説家にはしばしば準備のための時間があまりなく、彼らにとってはとりわけその演説の瞬間的な影響が重要だったので、そのような許諾は非常に自然であった。この種の剽窃に関しては、マイアーがハレ大学の1832年の講義カタログのプロオイミオンで詳しく扱っている〔『学問的小品集』、第2巻、307頁以下〕。ローマの作家の場合には、ギリシアの模範に対して彼らのオリジナリティの度合いを確定することが、とくに重要である。模倣の場合にここで許可されたものの限界がどのくらい広く引かれていたかを、キケローの哲学的書物が証明する。彼はある箇所の全体をギリシアの著作からほぼ文字通り典拠を挙げずに借用し、このような仕方と同僚に直接ギリシア哲学を知らしめることを、みずからの名誉と見なしている。例えば彼が『大カトー』にプラトンの『国家』からの大きな部分を組み入れたやり方を、今日のわれわれなら剽窃と呼ぶであろう。ギリシア人の古典的散文家の場合には、他人の業績のそのような利用を前提することは許されない。これらの散文家の場合には、あらゆる模倣は独創的な、芸術的意図から説明されるべきである。したがって、プラトンの『饗宴』における演説を、あらゆる可能的書物からの抜粋と見なすことは、まったくの間違いである。しかしもちろんそのなかでは、一定の演説のスタイルが模倣される。それは対話に高度のミミックな美を付与するし、また『メネクセノス』におけるように（原著120頁を見よ）、著者の芸術的目的に合致している⁴⁴。プラトンの『饗宴』

⁴⁴ [原注]「プラトンの饗宴の刊行見本についてのティールシュの批判」die Kritik von Thiersch's Specimen editionis Symposii Platonis (1809)（『小品集』第7巻、137頁以下）参照。

とクセノポーンの『饗宴』との比較は、プラトンが模倣する際にどのような処理しているかを示す。彼はここではクセノポーンによってまず選ばれた形式を躊躇なく受け入れるが、しかしそれをまったく独創的な仕方を取り扱う⁴⁵。ときおりまさに模倣のなかに最高度の芸術的な美すらも潜んでいる。1つの卓越した実例を提供するのは、ソポクレースの『エレクトラ』の有名な箇所(1415行)である。そこでは瀕死のクリュタイムネーストラが、アイスキュロスの同名の劇におけるアガメムノンと同一の言葉(1335行)を発する。すなわち、「ああ、斬られてしまった」(ὦ μοι πέπληγμαί)と「ああ、またしても」(ὦ μοι μάλ' αὖθις)という言葉である。それを通してアイスキュロスの悲劇が聴衆の記憶のなかに呼び起こされ、そして復讐の力はこの記憶による以上に強烈に彼らの魂の前に立ち現れることはできなかった⁴⁶。以上に述べたすべてのことにしたがえば、与えられた事例において、著者に他人の文章構成の模倣があると信じられるべきかどうかという問いは、あらゆる個人的な状況を考慮して判断されなければならない。彼のオリジナリティについての偏見によって判断されてはならない。

その著作が著者の国民的規定性にふさわしいかどうかを、文章構成にしたがって決定することは、著作の素材にしたがって決定することよりも難しい。というのは、個人の文体は国民的文体から非常に逸脱することがあるからである(原著128-129頁を見よ)。けれども、ひとは例えばヘレニズム期のものを、文体においてもまた、[古典期の]国民ギリシア的なものから大抵は容易に区別する。学派や時代による文体の発展もまたしばしば重要な基準を提供する。そこで多くのいわゆるアナクレオンの歌は、た

⁴⁵ [原注]「プラトンとクセノポーンの間には存在したと言われる敵愾心について」(『小品集』第4巻、5-18頁)参照。

⁴⁶ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレース、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、244頁以下参照。

しかに韻律の不完全性ゆえに、アナクレオン⁴⁷の学派と時代にふさわしくない。オルバウス教徒たちとすり替えられた詩行は、文章構成の全体において、はるかに新しい時代の特徴を帯びている。文体の様式に基礎づけられた判断においては、最後に、著者の固有の発展も考察対象となる。J・リプシウス以降、多くの人は『弁論家に関する対話』*Dialogus de oratoribus*を彼のその他の文体からの逸脱を理由に、タキトゥスのものでないと言ってきた。しかしこの逸脱は、この書物が著者の青年期の著作であるということから、完全に説明がつく（A・G・ランゲ『論文集・講演集』⁴⁸、3頁以下参照）。プラトンの対話篇の批判においては、ひとは執筆の時期を顧慮しないと、完全に間違ってしまう。完成された青年期の著作としては『パイドロス』が、成熟した年代の傑作たる『国家』から区別されるように、後者はふたたび老年期の未完の著作である『法律』からも区別されなければならない。

III. すべての作家が言語に与える様式的な形式を別にすれば、作家は言語の歴史の内部におけるおのが歴史的位置によって、および彼の言語がそのうちを動く圏域によって、個別に限界づけられた語彙をもっている。言語の要素とその構成の形式の一定の小さな部分が作家に適用される。さらに、すべての作家が言語の意味を同じ完全性をもって自分のものにするわけではないので、彼らは言語の正確さにおいても個々に異なっている。さて、もし著者の言語がその枠内を動いている制約を正確に知っているとすれば、ひとはその外に存在しているものを、ふさわしくないものと明言することができる。もちろんここでは完全な判断は不可能である。と

⁴⁷ Anakreon, Ἄνακρέων (c.BC 570–c.BC 485)。イーオニアのテオース出身の抒情詩人。美酒や美少年・乙女を主題にしたイーオニア方言の軽快な詩5巻を残したが、現在ではその断片がわずかに伝わるのである。その洗練された詩風は広く愛好されて、後世にも大きな影響を及ぼし、多数の模倣者を出した。

⁴⁸ Adolpf Gottlob Lange, *Vermischte Schriften und Reden*, herausgegeben von Karl Georg Jacob (Leipzig: Verlag von Friedrich Fleischer, 1832).

いうのは、たとえある形式あるいは構造がそれ以外のところでは著作家に現れないとしても、多くの場合にそれが著者の語彙に属している可能性に、ひとは異論を唱えることはできない。書物のなかに、前提されている著者の原稿の言語の慣用からの逸脱が見出される場合には、この可能性はすでに制限される。しかしその場合でも、そのような逸脱が彼のそれ以外の表現様式との類比に支えを見出さないかどうか、まず調べられるべきである。逸脱が他の時代あるいは他の国民性の特徴として証明される場合には、判断は最も確実である。この種の1つの確かな実例は、ヘカタイオス偽書(原著216-217頁を見よ)によってアッティカの大悲劇作家とすり替えられた詩行である。わたしはその詩行の言語がまったくヘレニズム的であることを証明した⁴⁹。(ヴォルフの『詩文選』⁵⁰第1巻, 165頁における)フシユケ⁵¹がこれに対して、そこで現れる、ヘレニズム期に非常に一般的な定式は、エウリーピデースにおいても見出される、と主張するとしても、当該の断片に関する判断はそれによって変更されはしない。というのは、例えばそこから、爾余のヘレニズムの形式もまた、失われてしまった悲劇作家の作品のなかにひょっとすると存在できたかもしれない、と結論づけることはできないからである。そのような形式の若干のものにおいては、このことはまったく不可能であり、またこれは断片の全体的性格に対応しているもので、これが単に偶然的にヘレニズムと一致しているのではないということのはたしかである。しかしながら、言語が前提されている著者の時代と国民性にふさわしくないとしても、1つの書物があっさりと本物でないとは必ずしも明言され得ない。というのは、言語は手を入れられることによって

⁴⁹ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、146頁以下参照。

⁵⁰ Friedrich August Wolf, *Litterarische Analekten*, 2 Bde. (Berlin: G. C. Nauck, 1817-20).

⁵¹ Immanuel Gottlieb Huschke (1761-1828)。ドイツの古典文献学者。ロストック大学教授 (1806-28)。

変えられ得るからである。このことは、われわれが1つの書物を抜粋からのみ知っているときに、とくにしばしばそうである。そのようにピロラーオスの断片においては、ときおりドーリア調の弁証法がのちの時代の散文のなかへ移され、そしてのちの時代の哲学的体系の言語の慣用とごちゃ混ぜになっている⁵²。そのような事例が潜んでいるかどうかは、言語だけからは大抵は決定されることができない。さて、著作家の時代や国民の規定性は別にして、あるものがある著作家の個人的な言語の慣用と一致しているかどうかは、彼の言語が鋭く限界づけられた円環をもっているときのみ、確実性をもって突きとめられる。ホメロスの詩やプラトンにおいては、決定は一般的に難しくはない。『イーリアス』においては、それどころか言語にしたがって、単に挿入箇所だけでなく、さまざまな部分の著者をも見分けることができる。例えばクセノポンにおいてはすでに事情が異なっている。間違っただけのものだとされる複数の小さな書物は、ほとんど同一の時代に属しているので、言語においては彼の本物の著作からあまり区別されない。ある著作家の言語の慣用が彼の時代と国民の一般的言語と合流していればいるほど、批判的分離はますます難しくなる。かくして、フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフがキケローの演説の真正性に反対して、言語の慣用における逸脱と思われるものから導き出した根拠は、大抵はきわめて薄弱である（とくに「マルッケルスのための演説の版」pro Marcello [ベルリン, 1802年] 参照）。模倣者は彼らが模範とした人物の言語の慣用も伝承し、それによって言語はきどったものになる。そのことによって、こっそりすり替えられた書物はしばしば容易に本物でないことが認識される。だが、その場合大抵はこの点における判断は、感情の繊細さに基づいており、それゆえより一層の根拠づけを必要とする⁵³。このこと

⁵² [原注]「ピュータゴラス学派のピロラーオスの教え」Philolaos des Pythagoreers lehren (1819), 44 頁参照。

⁵³ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』, 251 頁。

は時折次のことによって可能とされる。すなわち、そのような書物は、言語の慣用においても、著者と言われている他の本物の書物とのあまりにも大きな類似性を示しており、そしてその際に同時に、原作の言語形式が誤解されやすい仕方では受け入れられていることである。

2. ある書物が前提されている著者の個性にふさわしくない場合には、このことはつねに書物の内的性質と外的伝承との間の矛盾に基づいている。著者の名前や人物が他の仕方では知られているかどうかは別にして、まずテキストの伝承された形態は、書物そのものから突きとめられる実際の著者の個性と矛盾していることがある（原著211頁を見よ）。ここには不調和を止揚するためのただ1つの道が開かれている。つまりテキストの改訂ということである。その場合、もしその著作のなかに2つあるいはそれ以上の異なった個性が示されるのであれば、もともと分離されていた複数の書物が合本されており、したがって継ぎ目が探し求められる必要があるか、それとも書物に手が入っており、したがってもともとの形式を挿入部分から分離するという課題が成立するかである。もちろん、両方が同時に起こることもある。改訂は古文書学的批判に基づいてのみ、つまりふたたび外的証言の助けを借りて、遂行され得る。しかし、著者の個性が同時に歴史的に確定される場合にのみ、改訂は完全な説得力をもつものとなる。というのは、そのようにしてのみ書物の内容、文章構成、および語彙から取り出された根拠が、確固たる支点を持つようになるからである。さて、通常は書物の場合には、著者の名前はふたたび伝承によって与えられている。もし伝承が完全に信頼できるものであり、そしてそのように規定された著者の個性をなお別の仕方では知っているとすれば、同様に個性からのあらゆる逸脱はテキストの校訂によってのみ取り除くことができる。例えば、エウリーピデースの名前で保存されている『アウリスのイーピゲネイア』は、幾重にもエウリーピデースの個性にふさわしくない。しかしその作品がエウリーピデースのものであることは、外的証拠によって確実である。この矛盾は二重の校訂を仮定することによってのみ取り除かれ、そしてこのことは異文の性質から証明され得る⁵⁴。ピロラーオスの断片がもう

1つの事例を提供する。ピュータゴラス学派のこの人物が『魂について』*Περὶ φύσεως* という本を書いたことは、確実に証言されている。この本物の書物以外にはピロラーオスの名前での別の本は存在しなかったということが、同様に証言から明らかになる。ところで、保存されている断片は、その書物の内容と区分に関して伝承されていることと、実際に一致しており、そしてそれに加えて、われわれがすぐれた資料から知っているかぎりでは、それらの断片はピュータゴラスの教えと全体的に合致している。さて、もし他方で部分的に思想と言語において、それらがのちの時代の、とくに逍遙学派とストア派の特徴を帯びているとしても、ひとはだからといってそれらを——近年とくにシャルシュミット⁵⁵が行ったように——本物ではないと明言してはならない。もともとのテキストは、明らかに抜粋においては、哲学史における引用の際に頻繁に起こるほど、はなはだしく変更されてはいないので、校訂はまた容易にそれと判明する⁵⁶。もう1つのまったく確実な事例はプラトンの『法律』にある。この書物の真正性は同じく外的証言によって疑いなく確定されている。にもかかわらず、その著作が著者によって未完のまま残され、彼の友人であり弟子であるオプース出身のピリッポス⁵⁷によって編集された様を伝える、当の伝承が万

⁵⁴ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』*Graecae tragoediae principum, Aeschyli, Sophoclis, Euripidis, num ea, quae supersunt, genuina omnia sint, et forma primitiva servata, an eorum familiis aliquid debeat ex iis tribui* (Heidelberg: Mohr et Zimmer, 1808) 参照。それに加えて、この書の自己広告（『小品集』第7巻、99-106頁）。

⁵⁵ Karl Schaarschmidt (1822-1909)。文献学者・哲学者。

⁵⁶ [原注]『ピュータゴラス学派のピロラーオスの教え。彼の著作の断片とともに』*Philolaos des Pythagoreers Lehren nebst den Bruchstücken seines Werkes* (Berlin, 1819)。シャルシュミットの批判に関しては、『小品集』第3巻、321頁。

⁵⁷ Philippos, Φίλιππος (前4世紀中頃)。オプース出身の数学者・天文学者。プラトンの友人にして弟子。まだ蠟板上にあった師プラトンの『法律』を筆

が一役に立たないとすれば、われわれはプラトンの思想体系と文章構成の仕方からの逸脱の存在をいかに説明すべきか、当惑した状態に陥るであろう。手が入られたところを個々に証明することは困難な課題であり続けるにもかかわらず、これによって実際この著作の性質は完全に説明がつく⁵⁸。

けれども、書物の著者が外的証言によっていつも確実に規定されているわけではない。外的伝承によって作者とされる著者に著作がふさわしくないことは、内的根拠がこれを十分に証明することができる。この場合には、不調和が校訂によって取り除かれるべきか、それとも著作が著者と言われている人物から完全に剥奪されるべきか、ひとは疑わしい状態にある。外的証言がまったく信頼に値しないと証明されないかぎり、ひとは第一の道を進むであろう。ひとはここで文字作品の批判に際して、造形芸術の作品を判断する際と同じ処理をしなければならない。もしある彫刻円柱が有名な巨匠の作だといわれ、そして鼻がこの巨匠のスタイルに一致しないことがわかれば、ひとはまず、例えばトルソは真正であり、ただ頭部のみが、あるいはさらに鼻のみが、別人の手によって作られたかどうか、調べなければならない。しかしもちろん、ひとは純粹に内的な根拠に基づいて、文字作品が一定の著者から完全に剥奪されるべきであるとの、確実な確信へと到達することができる。そのときに真の著者を規定するのは批判の課題である。匿名の著作の場合や、しばしば碑文の断片やいろいろな本の場合にそうであるように、著者に関するあらゆる伝承が欠如しているときには、同じ課題が存在する。ここでは内的根拠によってのみでは目標に到達することはできず、むしろ当該の書物の真の起源を発見するためには、ひとは内的根拠を外的な歴史的事実と結合しなければならない。もし書物の内容、文章構成の仕方、語彙から、それがいかなる時代に属するかが突きと

者・編集したといわれる。

⁵⁸ [原注]『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』、64-198頁。

められ、そして著者が一定の範囲の個性の持ち主のなかで追及されるべきであれば、ひとはこれらの個性のなかのどれが書物の個人的性格と一致するかを検査するであろう。例えばシュライアーマッハーを知っていた人は、ルツインデに関する書簡⁵⁹が刊行された際に、彼が著者であると即座にわかった。彼の精神がここほど完全に発現しているところはどこにもない。ヒルトの『ヒエロドゥーレン』⁶⁰に対する駁論におけるように、匿名の書物においてみずからの鋭く際立った人格を隠すことは、ベッティガー⁶¹にとっては可能ではなかった⁶²。けれども似たような場合に、判断はきわめて容易にひとを欺く。周知のようにフィヒテの『啓示の批判』は、彼の事前の承諾なしに匿名で印刷されていたが、カントが本当の著者を明かすまでは、一般的にカントの著作と見なされた。そのような思い違いは、状況がかぎりなく不明瞭である古代の著作の場合に、いかに容易く起こり得るであろうか！ひとはそれゆえ、その書物が当人に不適切ではないという理由で、古い書物をその著者のものだとすることはできず、さらに別の外的証拠が付け加わる場合にかぎって、そのようにすることができるであら

⁵⁹ Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, *Vertraute Briefe über Friedrich Schlegels Lucinde* (Lübeck und Leipzig: Friedrich Bohn, 1800); jetzt abgedruckt in: KGA I. Abt. Band 3, *Schriften aus der Berliner Zeit 1800-1802* (Berlin: Walter de Gruyter, 1988), 139-216. なお、『ルツインデ』とは、フリードリヒ・シュレーゲル (Friedrich Schlegel, 1772-1829) が 1799 年にその第一部を公刊した小説で、初期ロマン主義主義の精神をあますところなく表現している。

⁶⁰ *Die Hierodulen*, herausgegeben von Aloys Hirt. Mit Beilegen von Aug. Boeckh und Ph. Buttmann (Berlin: L. W. Wittich, 1818). なお、ヒエロドゥーレ (Hierodule) — [ラ] hierodulus, [ギ] ἱερόδουλος に由来 — とは古代ギリシアの神殿で神に仕える Tempeldiener の意味であるが、通常、奴隷がその仕事に奉仕していたので、「神の奴隷」と訳されることもある。

⁶¹ Karl August Böttiger (1760-1835)。ドイツの考古学者・古典学者。

⁶² [原注]「ヒエロドゥーレンについて」Ueber die Hierodulen (『小品集』第 7 卷, 575 頁以下) 参照。

う。われわれは例えば、『ヘレンニウスのための修辞学』*Rhetorica ad Herennium*⁶³の著者が誰であるか知らない。キケローが著者でないことは、内的根拠から判明している。まったく同じように、その書物がスッラの時代⁶⁴に書かれていることも判明している。しかしここにはまったく判然としない数の可能性が潜んでいるので、われわれがその人物について知っていることが、その書物の性格と一致しているというだけの理由で、例えばその時代のある1人の修辞学の著作家を抽出するとすれば、それはまったく無批判的なやり方である。アントーニウス・グニポ⁶⁵を著者として挙げるのは、シュッツ⁶⁶のまったく恣意的な思いつきであった。そのような根拠づけられていない仮説は、ヴェルンスドルフ編集の『ラテン小詩人たち』⁶⁷のなかにたびたび見出される。結合的批判が肯定的な結果に導かれるべきであるとすれば、それはまさに確実な外的拠りどころを必要とする。そのような拠りどころは、まず書物の内容と関係している歴史的出

⁶³ *Rhetorica ad Herennium* は、ラテン語で現存する最古の修辞学の教科書。紀元前90年頃に成立したと考えられている。以前はキケローが作者であるとされていたが、現在では作者不詳となっている。

⁶⁴ 「スッラの時代」(sullanische Zeit) は、ときに zur Zeit Sullas と表記されるが、そこでいわれるスッラとは、ルーキウス・コルネリウス・スッラ(Lucius Cornelius Sulla, BC 138-BC 78) のこと。彼はローマ共和政末期の将軍、政治家。独裁官(ディクタートル)として君臨した(在任、前82~前79)。

⁶⁵ Marcus Antonius Gniphos (生没不詳)。グニポはガリア人で、幼少の頃のカエサル(ガイウス・ユリウス・カエサル)の家庭教師を務めたとされる。スエートーニウスが『名士伝』*De Viris Illustribus* (110頃)のなかの「文法学者伝」7でそのように伝えている。

⁶⁶ Christian Gottfried Schütz (1747-1832)。ドイツの人文学者。イエナやハレの教授を務めた。著書に *Opuscula philologica et philosophica* (Halle, 1830) がある。

⁶⁷ Johann Christian Wernsdorff, *Poetae latini minores*, 6 Bde. (Altenburg und Helmstedt: C. G. Fleckeisen, 1780-99).

来事である。例えば、ひとは『アレクサンドロス大王の歴史』*Historiae Alexandri Magni*の著者であるクルティウス・ルーフス⁶⁸を、ただ名前でのみ知っていた。しかしその書物のなかには(X, 9)、著者がまさに体験したものと描写している出来事への歴史的なほめかきが見出される。ここでいかなる出来事がほめかされているかは、いまや歴史的に突きとめられるべきである。そしてこれはさまざまな仕方でも試みられてきた。もっとも蓋然性が高いのは、他の外的および内的な根拠によって支えられた見方で、それはその箇所ではカリグラの暗殺の成り行きが問題となっているので、この本はクラウディウス帝⁶⁹の時代に書かれたように思われる、という見方である。『フレックイゼン年報』第77巻(1858年)、282頁以下におけるトイフェルの見解⁷⁰を参照のこと。しかし結合的批判の場合には、その書物が著者を表示してどこかで引用されているかどうかということに、主に注意を向ける必要があるであろう。そのような引用は書物のタイトル、内容、スタイル形式、あるいは言語に関係し得るが、しばしば判然

⁶⁸ Quintus Curtius Rufus (?-53)。ローマ帝政期の歴史家。彼の活躍期には諸説があったが、近年ではクラウディウス帝の治下と推測されている。現存する『アレクサンドロス大王の事蹟について』*De Rebus Gestis Alexandri Magni* (*Historiae Alexandri Magni*) は、全10巻のうち、最初の2巻が失われており、他の諸巻にも欠けた部分が少なくない。

⁶⁹ Claudius I (BC 10-54; 在位 41-54)。ローマ皇帝。大ドルーススと小アントニアの子。

⁷⁰ Wilhelm Sigmund Teuffel, *Besprechung über Grundriss der römischen Literatur. Von G. Bernhardy. Dritte Bearbeitung.* Braunschweig, C. A. Schwetschke und Sohn (M. Bruhn), 1857, XXIV u. 814S, in *Jahrbücher für classischen Philologie*, herausgegeben von Alfred Fleckeisen, vierter Jahrgang 1858 oder der *Jahnschen Jahrbücher für Philologie und Paedagogik*, siebenundsiebenzigster Band (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1858), 276-286, hier 282ff.; ders., *Geschichte der römischen Literatur*, 3. Aufl. (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1875), 654 (§ 291,1).

としなかったり、歪められていたり、あるいは書物と一致しなかったりする。それはこの書物が当該の点そのものにおいて歪められているからである。それゆえ、そのような間接的な証言の発見は、きわめて澁刺とした注意深さがあっても、またきわめて立ち入った詳細研究においても、しばしば幸運なつかみ取りによってのみもたらされる。例えばわたしは内的根拠から、『ヒッパルコス』と『ミーノース』はプラトンに由来することができないと認識していた(原著219-220頁を見よ)。それ以外に、2つの対話篇は文章構成の仕方と言語の慣用にしたがえば、相互に瓜二つのごとく類似しているので、それらは1人の著者に帰せられるべきであることがわかった。それらはさらに本質的に他の2つの対話、つまり『正しさについて』 *περὶ δικαίου* と『徳について』 *περὶ ἀρετῆς* と合致している。しかし言語にしたがえば、それらはソクラテスとプラトンの時代に属している。これらすべてのことが内的根拠からわたしにとくに明らかにになっていたのちに、わたしはディオゲネース・ラエルティウス II, 122, 123において、ソクラテスの友人の靴屋のシモンによる4つの書物が引用されているのを見出した。つまり、『正しさについて』 *περὶ δικαίου*, 『徳は教えられ得ないということについて』 *περὶ ἀρετῆς ὅτι οὐ διδακτόν*, 『法について』 *περὶ νόμου*, 『利得について』 *περὶ φιλοκερδοῦς* である。最後の2つのタイトルは、疑いなく『ミーノース』と『ヒッパルコス』のもともとのタイトルである(原著219頁を見よ)。そこから、シモンが4つの非常に類似した偽プラトンの対話の作者であることは、なるほど確実ではないが、しかしありそうなことではある。とくにこの仮説は内的および外的根拠によってさらに広範に支持されるからである⁷¹。アテーナイ人の国家に関する書物がクセノポンに由来しないことは、内的根拠から明らかになる。それがペロポネネース戦争時のアテーナイの1人の寡頭制の支持者によって執筆されていることを、ひとは歴史的結合によって見出す。さて、ポルックスにおい

⁷¹ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』, 42頁以下参照。

てはクリティアスに関する注目すべき表現が引用される。その引用は——純粹に文法的な根拠から帰結するように——明らかに誤解を招きやすく、そしてアテナイの国家に関する書物のある個所の前後関係から、これが誤解であることが明らかになる。それゆえ、その引用はこの箇所に関係しており、そしてクリティアス、つまりカッライスクロスの息子がこの偽プラトンの書物の著者である可能性がきわめて高い。われわれが彼について歴史的に知っていることは、この仮説と一致する⁷²。当然のことながら、覆い隠された引用の探索にあたっては、最大の慎重さをもって事に当たらなければならない。例えばグルッペ⁷³（『アリアドネー』561頁）は、アテナイオースにおける1つの引用から、『アウリスのイーピゲネイア』はエウリーピデースにではなく、カイレーモン⁷⁴に帰されるべきである、と結論づけようとする。しかしながら、カイレーモンにおいては、その個所でアテナイオースからのまったく不明確な引用は、イーピゲネイアに関するそれ以外の証言と比較するといかなる証明力ももたない⁷⁵。内的根拠との結合におけるこれらの証言によって、この悲劇の真正性は疑問の余地なく提示されるので、テキストの目下の性質の原因として判明する、さらに手を入れる作業の張本人を突きとめることのみが問題となり得る（原著225頁を見よ）。この場合、当然のことながら、書物の著者を突きとめる場合と同じ手続きが取られるべきである。さて、われわれは〔古代ギリシア演劇の〕ディダスカリオン上演記録から、イーピゲネイアは有名なエウリーピデースの死の直後、同名の甥によって上演されている、ということを知っており、そし

⁷² [原注] 『アテナイ人の国家財政』、第1巻、433頁以下。

⁷³ Otto Friedrich Gruppe (1804-76)。ドイツの古典文献学者、ジャーナリスト。

⁷⁴ Khairemon, Χαίρημων, Chaeremon (生没不詳)。前4世紀に活躍したアテナイの悲劇詩人。

⁷⁵ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』289頁以下参照。

て他の歴史的事実との結合によって、これが2回目の上演であったということが明らかになる。この第2回目の上演の際に、主としてその間に上演されたアリストパネースの『蛙』を考慮して、推敲が企てられており、それによってその推敲の特質は大部分説明がつく。以前のものの代わりに入ってきた合唱隊の歌のなかに、『イーリアス』の船のカatalogに倣った船を数えるシーンが見出される。そしてそれはその独特な形式によって、ふたたび歴史的な覚え書きに対応しているが、それによればホメロスの校訂は若い方のエウリーピデースに帰される。こうしたあらゆる事情から、若い方のエウリーピデースがこの劇を今日の形式へともたらしたことが帰結される⁷⁶。

結合的批判はさながら批判的なパンクラティオン⁷⁷のようなものである。というのは、パンクラティオンが「終わりになきレスリング」(ἀτελής πάλη)と「終わりになきボクシング」(ἀτελής πυγμή)から成り立っていたように、結合的批判はその強みを不完全なあるいは不備な外的証言と不備な内的根拠との芸術的結合に有しているからである。しかし内的根拠はそれ自体としてはつねに不十分なので、外的証言が足りないところでは至るところで、結合的批判が必要である。さて、もしその信憑性が疑わしければ、著者の個性についての最も完全な情報ですら不十分である。それゆえ、すべての個人的批判は、最終的には、外的証拠の信憑性についての検証に基づいている。

このような検証にとって確かな基礎をもつためには、ひとは古代の文字

⁷⁶ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』214頁以下、および『小品集』第5巻、121頁の注120と『小品集』第4巻、189頁以下参照。

⁷⁷ 古代ギリシアの格闘競技。「全力格闘技」と訳されることもある。レスリングとボクシングを合わせた上に、さらに荒っぽさを加えたような激しい種目で、オリュンピア競技祭には第33回(前648)から登場し、ネメア競技祭、イストミア競技祭にも採用された。

作品の起源に関する伝承が、いかなる原因によって、またいかなる広さにおいて、曇らされているかを明らかにしなければならない。最古の著作は文字がまだ使用されていなかった時代に由来する。それはもともと歌手や吟遊詩人によってのみ受け継がれた詩歌である。歌手の名前はすぐに忘れられた。詩歌を朗読する人は誰でも、それを作り替えてさらに継続することができた。それゆえ、ここで結合的批判は極めて広範な活動の余地をもっている。ホメーロスの詩の場合には、結合的批判は1人あるいは複数の人物を著者として証明することを目当てにすることはできず、むしろ個々の構成要素の交連を規定する必要がある。これらの構成要素がいかにして統一的な著作へと結合されたかは、しかるのちイーオニアの歌手の同業者組合の効力から歴史的に説明される⁷⁸。それと類比的な仕方では、批判はヘーシオドスの詩に関係づけられるであろう。ひとは著作と時代のなかで、最初の著者の人物像を詩そのものの情報から一定程度まで確定することができるだけである。キュクロス派の叙事詩の場合には、詩人の名前はたしかにより確実に伝承されている。詩はより稀にしか朗読されず、最初から書きとどめられ、したがってその著者に関してはほとんど疑いが生じ得なかった。これに対して、ホメーロス以前の創作に関する伝承はまったく不確かであらざるを得なかった。これらのなかの太古の残存作品が、とくに神託や密儀によって保存されてきたということは疑いを容れない。しかしソローンの時代に密儀的学派がそうした伝承に結びついたとき、ひとがオルベウス、ムーサイオス⁷⁹、オーレーン⁸⁰等々に帰したところの、新

⁷⁸ [原注]「ホメーロスのすり替えについて。1834年の講義カタログへのプロオイミオン」De ὑποβολῇ Homericā. Prooemium zum Lektionskatalog 1834（『小品集』第4巻、385頁以下）参照。

⁷⁹ Musaios, Μουσαῖος。ホメーロス以前のなかば伝説的な詩人。トラケーの出身であると言われ、オルベウスまたはリノスの弟子であると称せられた。彼の名のもとに伝わる神託集があった。

⁸⁰ Olen, Ὀλην。ムーサイオス以前の伝説的な詩人。ヒュベルボレイオス人ともリュキア人とも考えられ、アポローンとアルテミスの崇拝をデーロス島

しい詩歌が成立した。それゆえ、われわれに保存されているすべての密儀的詩歌の断片の場合、結合的批判の課題は、最古の創作の理念圏域と性格を近似的に突きとめ、そしてのちの改造をその張本人にまで遡源すること、ただそれのみである。アリストテレス以前のギリシア文学の最盛期においても、著作の著者に関する伝承はしばしば非常に保証されていないものであった。正規の書肆は存在しなかった。作家は必ずしも書物のタイトルに自分の名前をつけなかった。たしかにプラトンの対話篇とクセノポーンの書物は、名前なしに流通していた。文献がまだ大きな分量をもっていたかぎり、著者は十分に知られていた。ちなみに哲学的書物にとっては、まずプラトンのアカデーメイアのなかに確固たる伝統が築かれていた。けれども、ここでは同時に、学派にしたがってのみプラトンのと表示され、のちに容易にプラトン自身に付与され得た書物が、執筆された。同様に、アリストテレスの書物は彼の弟子たちが書いたいろいろな論文と混ぜ合わされてきた⁸¹。最も偉大な詩人の演劇的作品ですら、いかに奇形化から守られなかったかは、リュクールゴスの有名な法律が証明している（原著187頁を見よ）。しかし手を入れられた作品は、上演の際に手を入れた人物の名前で届け出られ、その情報がのちに上演記録ダイダスカリエンのなかに移行したのであった⁸²。アッティカの演説の全盛期にはなお、なされたばかりの演説は名前を表示せず読まれるために出回った。かくして、例えばハリカルナッソスのディオニューシオスがデイナルコス⁸³の複数の演説に対して行った批判も説明がつく。というのは、それらの演説はデイナルコスが生きていた

にもたらし、神たちの誕生を讃歌を作って祝った。その歌は歴史時代までデーロスで誦されていたという。

⁸¹ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、99頁参照。

⁸² [原注] 同上、34、228頁以下。

⁸³ Deinarkhos, Δείναρχος (c.BC 361-c.BC 291)。アッティカ十大雄弁家の末席に置かれる。

状況や時代にまったく適合させられないということを、彼は証明するからである。つまり、ひとがますます増える大量の書物を収集し始めたとき、多くの場合に伝承はすでに潰えていたり、あるいは不確かになっていたりした。そしてその場合、著者は推測によって、いずれにせよしばしば間違っ
て規定されたのである。パンフレットのような多くの匿名の書物の場合、著者は一般に知られないままであったという事実によって、この不確かさはさらに拡大した。それに加えて、ひとは同一の名前の作家を取り違えた。例えば、有名なヒポクラテースにしばしば彼の学派の医者たちの書物が添付されており、それらのなかで彼の名前が受け継がれた⁸⁴。後期ギリシア時代には、マルクス・アウレリウス⁸⁵の治世下で生きていたアレクサンドリア出身のデーメトリオス⁸⁶の書物『文体について』*περὶ ἐρμηνείας*が、パレーロン出身のデーメトリオスに添付されるような、きわめて粗悪な取り違えが企てられている。修辞学者の学校において有名な人物のもとで彼らの模倣のために仕上げられた訓練の演説や書簡が、誤謬の新しい源泉となった。こうした学校の外で、ここから1つの固有の文学ジャンルが発展した。そしてそのような虚構はのちにしばしば本物と見なされた。例えば、われわれに保存されているプラトンの書簡は、キケローの時代にはすでに本物と見なされた。あまり批判的でないローマ人のもとでは、ギリシア人のもとで起こったのと同じ混乱の原因は、より古い時代の文献のなかでただもうはるかに甚大な影響を及ぼした。伝承の批判的な検討整理はアレクサンドリアの文法学者によってはじめて始まる。彼らの批判は優れていた。彼らは豊富な材料を目の前にもっており、ジャンル

⁸⁴ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレーズ、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、99、112、231頁。

⁸⁵ Marcus Aurelius (121-180)。ローマ皇帝（在位 161-180）。五賢帝の最後にあたる。「哲人皇帝」とも称される。

⁸⁶ タルソスの文法学者デーメトリオス（後1世紀）のこと。

の性格と個々の作家を、大いなる繊細さをもって見分けた。それにもかかわらず、彼らも混乱した伝承の場合には、思い違いをせざるを得なかった。とくにプラトンやピндаロスのような著者に関して、多くの小さな著作がこれまで散り散りに流布しており、それらがいまはじめて集められたとすれば、そうであった。というのは、上で(原著 231-214頁)述べたように、ここでは批判の峻厳さそのもののなかに、間違った判断へのそそのかしが存在したからである。しかし同時に、いまや意図的な歪曲による伝承の混濁化が起こってきた。歪曲の動機はまず利益追求の欲望であった。プトレマイオス王家とアッタロス王家⁸⁷が古い本に高価なお金を支払って以来、世に知られていない書物やいろいろな材料から集めてみずから書いた書物を有名な名前にこっそり押しつけることが、得になる商売となった。そのような資料から新ピュータゴラス主義も流れ出てきたが、それは秘密の知識の探究を養い、それを通じて歪曲をよりいっそう助長した。利益追求の欲望と並んで、悪意が文学的欺瞞へと駆り立てた。かくして、他人の文体を模倣することに特別な技量を所有していたランプサコスのアナクシメネース⁸⁸は、彼の論敵テオポンポス⁸⁹の名前で、アテーナイ、スパルター、テーバイに対する誹謗の言葉に溢れた、『3つの市民』*Τριπολιτικός* というタイトルの書物を執筆した。その書物を広めることによって、彼はテオポンポスを以前にもましてヘラス〔ギリシア〕で憎まれるようにした。その本が編集されるや否や、テオポンポスは自分は著者ではないと明言した。しかしひととは彼の言うことを信じなかった。それは彼の書き方がその

⁸⁷ 前 282 年から前 133 年にかけて、小アジアのペルガモンを中心に栄えた王家。

⁸⁸ Anaximenes, Ἀναξίμενης Λάμψακος, Anaximenes Lampscacus (c.BC 380-c. BC 320)。ギリシアの歴史家・雄弁家。キュニコス派のディオゲネースおよびゾーイロスの弟子で、アレクサンドロス大王の師の1人であるといわれている。

⁸⁹ Theopompos, Θεόπομπος, Theopompus (c.BC 378/377-c.BC 320)。キオス出身の歴史家。アテーナイでイソクラテースに学んだと考えられる。

なかできわめて見事に模倣されていたからである（パウサニアース [『ギリシア案内記』], 第4巻, 18頁参照）。他の歪曲は自分自身の見解に可能なかぎり高い権威を保証しようとの努力から説明がつく。この目的のために、ひとつには書物全体が他人の有名な名前のもとで編集されているのであり、またひとつには現実には存在しない証拠箇所を主張するために、書物全体が作り出されたのである。例えば、プルートルコスによるものといわれる、『川について』 *περί ποταμῶν* という書物が存在するが、そのなかで決して存在したことの無い著作が引用される。とくにユダヤ人とキリスト教徒はそのような仕方です、「神のより大いなる栄光のために」(in majorem Dei gloriam) 歪曲を企てた。彼らはギリシア的な知恵が聖書から由来したものであることを提示しようと努め、そしてこのために古代の詩人や賢者の箴言を自分たちの目的にしたがって改造しただけでなく、それらに韻文と散文における長短の箇所をこっそり押しつけたのである。アレクサンドリア以後の時代に、批判が失われれば失われるほど、誤謬と欺瞞によって引き起こされた伝承の混濁化は、ますますひどくなった。ローマの時代に書籍販売業が広まるにつれて、書写人や校正者によっても新しい過ちが起こった。欄外注が本文のなかに書き込まれただけでなく、何らかの理由で著作に付け加えられている節全体あるいは小さな書物が、本文そのものに数え入れられもした。さまざまな著者による複数の書物を集める際に、ときにはタイトルが失われた。そののちいろいろな著作が融合したか、あるいは校正者が「そう思われるごとく」ut videtur という表示を用いて、推測にしたがって欠けているタイトルを補完したが、この表示はその後の写しにおいては容易になくなった等々。書写人による腐敗は当然中世にも継続し、そしてこの期間中にもまた、しかしとくにルネサンスの時代に、大抵は古いテキストの出版によってもったいぶるという目的で、意図的な歪曲が発生した。この関係でとくに悪名高いのは、一連の表向き古いテキストを偽造したヴィテルボーのアンニウス (1432-1502)⁹⁰ である。『M・

⁹⁰ Anniius von Viterbo (1432-1502)。イタリアのドミニコ会修道士。歴史的文

トゥッリウス・キケローの慰め——いまはじめて再び見出され、大衆の目に触れるように刊行された書物——』⁹¹という書物は、有名なシゴーニョ(1524-84)⁹²に由来するものであるが、しかしおそらくこの人物によって文体の訓練として仕上げられた、キケローの書物を修復したものの復刻本にすぎない。ふざけてあるいは悪意でなされた歪曲は、例えばムレトゥスがこっそり押しつけたトラベアの詩行に関して行ったように(原著214頁を見よ)、それらがのちに自白された場合には、当然のことながら危険性はない。とはいえ、そのような公然たる暴露はめったになされなかった。ちなみに、文学的欺瞞はもっとも最近の時代に至るまで継続してきた。グライスヴォルトの文献学の教授であるクリスティアン・ヴィルヘルム・アールヴァルト⁹³は、みずからのピンダロス批判を、実際には存在しないナポリの写本の校合を捏造して、支持しようと努めた⁹⁴。1837年、ブレーメンのフリードリヒ・ヴァーゲンフェルト⁹⁵は、ポルトガルの修道院で発見されたといわれる写本にしたがって、捏造されたサンチュニアトン⁹⁶を編集した(『サンチュニアトンのフェニキア史の9つの文書——ビブロスのフィロンによるギリシア語の詩句による——』⁹⁷) (『ゲッティンゲン学術広告』

書の偽造者として有名。

⁹¹ *M. Tullii Ciceronis consolation. Liber nunc primum repertus et in licem editus* (Köln, 1583).

⁹² [伊] Carlo Sigonio [ラ] Sigonius (1524-84)。イタリアの文学者。ヴェネツィア (1552)、パドヴァ (1560)、ポローニャ (1563) の各大学教授を歴任。

⁹³ Christian Wilhelm Ahlwardt (1760-1830)。グライフスヴァルトで生まれ同地で没した文献学者。

⁹⁴ [原注] フレーゼ (Karl Freese) の書物『ピンダロスのナポリ写本について』*De manuscriptis Neapolitanis Pindari* (Hendess, 1835) の広告(『小品集』第7巻, 514頁以下) 参照。

⁹⁵ Friedrich Wagenfeld (1810-46)。ドイツの古典文献学者。

⁹⁶ Sanchuniathon (生没不詳)。古代フェニキアの作家。彼についてのすべての情報は、ビブロスのフィロンの作品(100年ごろ)に由来する。

⁹⁷ *Sanchuniathonis historiarum Phoeniciae libros novem graece versos a*

1837年、第52号所収のカール・オトフリート・ミュラーの批判⁹⁸を参照のこと）。ギリシア人のシモーニデース⁹⁹による偽物ウラニオスのパリムプセストのすり替えが記憶に新しい（A・リュクールゴス『シモーニデース=ディンドルフのウラニオスに関する暴露された事実』¹⁰⁰参照）。にもかかわらず、最近の数世紀には偽造者はより容易でより得になる偽物の碑文や硬貨の生産に没頭してきているが、なかには驚くべきものも成し遂げられている（原著189-190頁を見よ）。

伝承が大きく損なわれている場合には、それが1つの引用のなかにあるにせよ、あるいは著者が明確に書き表していることのなかにあるにせよ、古い書物に関するあらゆる証言を入念な検査に服することが、明らかに必要である。第1の問いはここでもまたつねに、証言が真理を語ろうとしているかどうかである。悪名高い偽造者においては、この問いはただ例外的

Philone Byblio, herausgegeben von Friedrich Wagenfeld (Bremen: Karl Schünemann, 1837).

⁹⁸ Karl Otfried Müller, Rezension der Wagenfeldschen Publikation (1837), in *Göttingische Gelehrte Anzeigen* vom 1. April 1837 (Nr. 52), 507-517.

⁹⁹ Constantine Simonides (1820-67)。古文書学者。広範な学識と写本に関する知識を有し、また卓越した能筆家で、19世紀の最も多彩な偽造者。1820年にギリシアで生まれ、1839年と1841年の間、および1852年にふたたびアトス山の修道院で生活し、そこで聖書の写本を幾つか手に入れ、またみずから写本の偽造を行った。ウラニオス作のエジプト王の歴史という触れ込みの写本も、実はシモーニデースが精巧に偽造した贋作であったが、偉大な古典学者のディンドルフ（Karl Wilhelm Dindorf, 1802-1883）も一時これを本物と鑑定したために、ベルリンアカデミーを巻き込む一大事件に発展した。「シモーニデース=ディンドルフのウラニオス」と呼ばれるのはこのためである。いずれにせよ、ディンドルフはこれによって大きく信頼性を失うことになった。

¹⁰⁰ Alexander Lykourgos, *Enthüllung über den Simonides-Dindorf'sche Uranios*. Unter Beifügung eines Berichts von Herrn Prof. Dr. Tischendorf (Leipzig: G. L. Fritzsche, 1856; 2. vermehrte Aufl., 1856).

な場合にのみ肯定され得る。そしてこのためには特別な証明が必要であり、この証明なくしては彼らの証言はまったく価値がない。例えば、偽造したことを認めたユダヤ人のアリストブローロス¹⁰¹が、偽ヘカタイオスの断片について証言するとき、この断片はそれによってよりいっそう疑わしくなるだけである。ひとはしばしば悪名高い偽造から偽造者の個性と偽造者を主導する動機を認識し、そしてこれにしたがってつぎに偽造者の疑わしい証言を判断することができる。ペトリッツォプロ¹⁰²によって編集されたレフカス¹⁰³の碑文は、非常に古いものであるように思われ、そしてゴットフリート・ヘルマンによって疑いなく本物であると承認された。しかしおよそそれがかつて存在したということは、ペトリッツォプロのみが証言した。この人はレフカスに関するその他の点では非常に学識に富む本のなかでこの碑文を印刷に付したが、そのなかで彼は一度も書かれていない本を引用している。例えば、ヴェルンスドルフ¹⁰⁴の『リュクールゴス・エポキについて』*de Lycurgi epochis*等々である。彼はそれによって偽造者であることが暴かれ、そして彼の証言は、碑文の真正性に反対する内的根拠に照らして、あらゆる意義を失った。つまり、その碑文は彼の本の引用と同じ目的で捏造されていたのである¹⁰⁵。古代のキューレネー¹⁰⁶の地域で発見されたといわれる、フェニキア語とギリシア語で作成された碑文の場合、事情は類似していた。この碑文は、ゲゼーニウス¹⁰⁷のような識者たちに

¹⁰¹ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、146頁。

¹⁰² Demetrio Petrizzopulo (生没不詳)。

¹⁰³ イーオニア諸島にあるギリシア領の島。Leukas (Greek: Λευκάδα, [lef'kaða]; Ancient Greek: Λευκάς)。

¹⁰⁴ Gottlieb Wernsdorff (1717-74)。ドイツの教育者、修辞学者、作家。

¹⁰⁵ [原注] 『ギリシア碑文集成』Nr. 43, および『ギリシア碑文集成』についてのG・ヘルマンの書評に対する反論(『小品集』第7巻, 257-258頁)参照。

¹⁰⁶ アフリカ北部の地中海に臨む古代都市(第1部の脚注105参照)。

¹⁰⁷ Friedrich Heinrich Wilhelm Gesenius (1786-1842)。ドイツの神学者、セム

よって、5-6世紀のグノーシス主義者が製造した作品と見なされたが、ついにわたしが次のことを証明した。すなわち、唯一の証人であるフランス人の技師、マルタ島のグロンゲネットは、学識あるフォルティア・ドゥルバン侯爵¹⁰⁸の監督下で、のちにもう1つの碑文を偽造したが、この碑文はアトランティスについての侯爵の奇抜な見解を、一見太古のものと思しき文書によって信じ込ませようとする傾向を、キューレネーの碑文と共有しているということである¹⁰⁹。しかし悪名高い偽造者の証言ですら、いかに個人的批判によって証明する力を保持しているかということ、ひとはフルモン¹¹⁰の碑文集成によって最もよく学ぶことができる。彼はギリシアへの旅行中（1729-30年）に多数の碑文を書き写したが、これらの複写の性格はいまなお現存している原本オリジナルと比較することで確定することができる。しかしこの軽薄な神父は、同時に、自分が発見した品々をよりいっそう重要に見せかけるために、一連の記念碑を捏造した。複数の記念碑において、このことはまったく明白である。そしてこうしたことから、偽造する際の彼の手口は突きとめられる。そののちこれによって、ひとは彼が書き写し

語学者。ハレ大学教授。神学的、宗教的偏見に囚われない厳密な比較言語学的方法によって、セム語学に貢献し、優れた聖書解釈者として知られている。

¹⁰⁸ Aglicol-Joseph Fortia d'Urban (1756-1843)。

¹⁰⁹ [原注]「マルタのまがいものの碑銘について。1832年の講義目録についてのプロオイミオン」*De titulis Melitensibus spuris*. Prooemium zum Lektionskatalog 1832 (『小品集』第4巻, 362頁以下) 参照。

¹¹⁰ Michel Fourmont (1690-1746)。フランスの神父、古典言語学者。Étienne Fourmont (1683-1745)の弟で、ともにフランスの「碑文アカデミー」(Akadémie des Inscriptions et Belles-Lettres)の会員。イギリス政府から写本や碑文の買い付けに派遣された際、豊富な写本や碑文を収集した。彼は1000以上の古代ギリシアの写本や碑文を所有していることを自慢していたが、そのなかには大多数の本物に混じって若干数の偽造されたものも含まれているという。

たものの^{オリジナル}原本がもはや見出せない場合に、彼の証言を判断するための基準をもっているのである¹¹¹。

さて、ある証人の信用性そのものが疑わしいとすれば、問題はその証人が信頼に足る証言を提示することができたかどうかである。一般に書物の起源に関しては、明らかに著者自身が一番よく知っている。それゆえ、著者はまたそれに関して最もよく証言を提示できる立場にある。そこから、著者が提供する情報は、通常最も信頼できるものとして現れざるを得ない。この種の最も単純な情報はタイトルに添えられた名前である。しかし古代の書物の場合、伝承の混濁化について述べられたところにしたがって、名前は証明力をもっていない。というのは、タイトルが実際に著者に由来するかどうか、ひとは決してあらかじめ知ることができないからである。これに対して多くの碑文の場合には、それらが誰に由来するのかが、信頼できる仕方で述べられている。そして同じく他の文字作品においては、しばしば著者は本文そのもののなかに、あるいは著者の名前の言及によって、あるいは人生の出来事に関する情報によって、あるいはそこから著者が確実に認識される他の個人的特徴によって、はっきりと表示されている。にもかかわらず、これに関してもまた、当該箇所が挿入されたものでないかどうか、つねに調べられるべきである。本物と認められている書物のなかで同一の著者の別の著作が言及されるとき、それとも別の著作から引用されるとき、このことはとくに重要である。そのような引用はアリストテレスの書物を判断する際の基礎を形づくっている。そしてシュライアマハーはプラトンの真正の対話篇の集成を、これらの相互関係と連関を見出すことによって編成した。けれども、著者の証言は決して絶対的に信用できるものではない。非常に沢山書いたために、最後には自分が何を書いたかもはや分からない作家も存在する。典型的な実例はディデュモス・カルケンテロスである。彼は「書き物を忘れた男」(Bibliolathas)という異名を得

¹¹¹ [原注] 『ギリシア碑文集成』, Nr. 44-69 参照。

だが、それは彼が自分自身の本をもはや知らなかったからである¹¹²。さらに、複数の著者による共同の産物の場合には、あとから自分が関与した部分を規定することは、しばしば本人にとってすら不可能である。わたしは近代の際立った事例を思い起こす。シェリングとヘーゲルは1802-1803年にイエナで、共同で『批判的哲学雑誌』*Kritische Journal der Philosophie*を刊行した。そのなかの若干の記事の場合、両者のうちのどちらが著者であるか、論争になっている。例えば、「自然哲学の哲学一般に対する関係」という論文の場合がそうである。この論文がヘーゲルの死後、彼の論文集の第1巻で複製されたとき、シェリングは彼自身が著者であって、ヘーゲルは著者ではないと宣言した。複数のヘーゲル主義者たち、とくにローゼンクランツ¹¹³とミヘレット¹¹⁴はこの主張を論難し、そしてその論文は実際にヘーゲルの論文集の第2版のなかにふたたび受け入れられている。ミヘレット「シェリングとヘーゲル。あるいは論文の真正性の証明、云々」¹¹⁵を参照のこと。おそらくこの論文は二人の哲学者によって共同で執筆された

¹¹² Didymos Khalkenteros, Δίδυμος Χαλκέντερος (c.C 80/63-c.BC 10)。アレクサンドリアに生まれ、アリストタルコスの創設した学校に学ぶ。アレクサンドリアとローマで活躍し、4000以上の著書を執筆したと言われる。超人的な勤勉さゆえに「青銅のはらわたをもつ男」(Khalkenteros)と渾名されたが、またあまりに大量の本を執筆したため、以前書いた内容と矛盾する記述もときおり見られ、そこから「書き物を忘れた男」(Bibliolathas)という異名も生まれた。現在では彼の著作の大半は失われてしまって、その中身を知ることはできない。

¹¹³ Johann Karl Friedrich Rosenkranz (1805-79)。哲学者。ヘーゲルの弟子で、ヘーゲルについて最初の伝記を書いたことでも知られている。K・ローゼンクランツ、中塾肇訳『ヘーゲル伝』（みすず書房、1983年）参照。

¹¹⁴ Karl Ludwig Michelet (1801-1893)。哲学者。ヘーゲルの信奉者。「ヘーゲル右派」「ヘーゲル左派」という名称を確定し、一般化させたことでも知られる。

¹¹⁵ Karl Ludwig Michelet, *Schelling und Hegel. Oder Beweis der Aechtheit der Abhandlung: Ueber das Verhältnis der Naturphilosophie zur Philosophie*

ものであろう。匿名の書物の場合にとくにひとを間違った方向に導くのは、ときにいわゆる著者に関して本人が行う証言である。クセノポーンの名前で保存されている『アナバシス』¹⁶は、一般的にクレノポーンの真正の書物と見なされる。しかしそれはギリシア史のなかで、それが言及されていなければならない場所(III, 1, 2)で、その書物は完全に無視される。それに対して、キューロスの遠征はシュラーケーサイ出身のテミストゲネースによって書かれたものであると、そこでは述べられる。というのは、Θεμιστογόενει Συρακοσίων γέγραπται [シュラーケーサイ出身のテミストゲネースによって書かれた]という言葉は、前後の文脈によれば別の仕方ではうまく理解され得ないからである。これは次のような仮定による以外にはほとんど説明がつかない。すなわち、クセノポーンの『アナバシス』は匿名で編集されている、という仮定である。というのは、実際には彼ではなく、テミストゲネースが著者であるということは考えがたい。しかしおそらく彼は、物語のなかで果たす抜きん出た役割ゆえに、いずれにせよ自分と近い結びつきにあり、おそらく仕上げる際に自分を手助けしてくれた1人の男の名前で、この書物を刊行するよう仕向けられていると感じることができた。しかしながら、これはあくまでも外的な都合に過ぎなかった。しかしだからといって、誰も本当の著者について疑いはしなかった。著者の名前はのちに文法学者によってタイトルに据えられ、そしてテミストゲネースの名前を駆逐した。古代人たちの証言もこの方向を指示してい

überhaupt (Berlin: Verlag von Ferdinand Dümmler, 1839).

¹⁶ 『アナバシス』は原題を *Kyru Anabasis*, Κύρου Ἀνάβασις といい、「キューロスの遠征」あるいは「内陸遠征記」と記されることもある。クセノポーンはソクラテスの弟子の1人で、プラトンとは雌雄を競う間柄であったが、前401年、師の忠告を聞かずにアカイメネース朝ペルシアの王子・小キューロスの遠征軍に傭兵として加わった。戦闘では勝利を得たものの、大将の小キューロスが戦死したため、クセノポーンがギリシア人傭兵1万人を率いて、さまざまな艱難辛苦を嘗めながら帰還した。この著作はその顛末を記したものの。

アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』（安酸）

る。ブルータルコス『アテーナイの栄光について』、第1巻、キュスター編『スーダ』の「テミストゲネース」の項、およびツェツェス『キリアデース』第7巻、930頁参照¹¹⁷。

書物の著者に次いで、著者の同時代人が最も信頼できる証人である。にもかかわらず、もし彼らが著者にとって個人的に遠い存在であれば、彼らもたしかに間違った伝承にしたがうということは、容易に可能である。このことは上に述べたことにしたがえば、ギリシア文学およびローマ文学の最良の時代においてすら真実であり得た。最もよく知っているのは、当然、著者の親戚、友人、弟子であり、とくに彼らに当該の書物を判断する能力があると信じることができるときである。この視点はとりわけプラトンの場合に考察の対象となる。彼の著作の批判にとって、とりわけアリストテレスの引用とほのめかしが重要である。彼は偉大な師の親密かつ長年にわたる友人として、また鋭い判断力のある人物として、最も資格のある証人である。もちろんそのような証言において、そうした証言自体がふたたび信頼できるものとして証明されることが重要である。例えば、プラトンの『メネクセノス』はアリストテレスの『修辞学』に2回引用されるが（I, 9とIII, 14）、もちろん著者の名前なしにである。しかしこれはプラトンからの引用に際して一般的なやり方である。だが、もしザウツェ（『ゲッティンゲン報告』、1864年、221頁）が主張したことが、すなわち、『修辞学』の第3巻が偽物か、あるいはひどく加筆されたものであるということが、真実であるとすれば、一方の証明箇所はなくなるであろう。しかし（ὡσπερ γὰρ Σωκράτης ἔλεγε [というのはソクラテスが言ったように] という言葉で導入される）第1巻における引用は、ソクラテスの口頭の表現に遡ることができるであろう。もちろん、もしプラトンの時代にアテーナイの祭りといかなる試合もまだ結びついていなかったということが確かであれば、すべての問いは決定されるであろう。というのは、リュースィアースのエピ

¹¹⁷ [原注]『小品集』第7巻、598頁参照。

タピオスならびにメネクセノスにおいては、試合が登場するので、二つの書物の非真正性は明らかであり、それゆえ『修辞学』の第3巻は少なくとも加筆されていることになるからである（原著120, 212頁参照）。

著者の同時代人ではない証人が書物にまつわる事柄について証言する場合に、必ず問題になるのは、彼が目前にある伝承にしたがって書物の起源について何を知ることができたか、そして彼がそれをどの程度正しく判断する能力を持っていたか、ということである。伝承の混濁化は一般に時間とともに増大するので、それ以外の点で同じ条件のもとでは、のちのものよりもより古い証言の方が信頼できる。しかし後代の証言は立ち入った研究と適切な判断のおかげで、しばしば信頼性においてより古い証言をはるかに凌駕することがある。それゆえ、あらゆる証言は個別に検証されなければならない。例えば、パウサニアスは後代の作家であり、幾つもの事柄においてあまり判断を示さない。しかし叙事詩人に関しては、彼の証言は大きな価値をもっている。それは彼が叙事文学に異常に精通し、叙事詩の本質にすっかり溶け込んでいたからである¹¹⁸。クインティリアヌスが『ヘレンニウスに与える修辞学書』をたびたびコルニフィキウス¹¹⁹の著作として引用するとすれば、このことは、その書物が彼の時代にこの名前で書籍取引されていた、という証明である。そこでわれわれはこの証言の妥当性を攻撃するいかなる根拠ももたない。というのは、クインティリアヌスは、彼にとってまだ完全なかたちで存在したこの修辞学の文献について、十分な判断力を持っていたからである。これに対して、彼がいわゆるキケロー的演説の真正性に対して十分な妥当性をもつ証人と見なされ得ないのは、ここでは伝承がすでに早い時期に混濁していた可能性があり、そしてその雄弁術の理論的知識と教養を積んだ雄弁家の感情にもかかわら

¹¹⁸ [原注]『小品集』第7巻, 601頁参照。

¹¹⁹ Quintus Cornificius (?-BC 42)。共和政末期の弁論家・詩人。キケローやカトウツルスの友。現存する4巻の *Rhetorica as Herennium* の著者と見なす説もある。

ず、外的な障害なしに支配的な見解に対する疑いが彼のうちに生ずることが
ができるには、彼があまりにも批判を所有していなかったからである。一
般的に、著者自身にあるいは著者に一番近い周囲の人々に由来しないところ
の、1つの書物の著者に関する積極的証言は、支配的見解の表現である
か、あるいは批判的推測の表現であり、それゆえいずれの場合にも——そ
れが可能なかぎり——内的根拠にしたがって検証されるべきである。こう
した検証の際に、当該の書物が古代に偽物だと言明されていたとすれば、
それは非常に重要な先例（Präjudiz）である。否定的批判は古代人の間で
は軽率に取り扱われたことはごく稀であり、そして彼らの判断は、最も後
期の時代においてすら、われわれに保存されているよりもかぎりなくはる
かに豊かな材料に支えられていた。もしウェアッロー¹²⁰が多数のプラウ
トゥスの断片を偽物として非難したとすれば、彼は確実にそのための最大
に説得力のある根拠をもっていたのである¹²¹。そしておそらくこれらの断
片は保存されていたであろうから、われわれとしては彼の判断をほとんど
変更できないであろう。アレクサンドリアの文法学者の『アテテーゼン』¹²²
は、われわれにとって最高度に重要なものになるであろう。そして彼らの
批判のうちのごくわずかしが保存されていないということは、弁償できな
い損失である。しかし1つの書物を退けるためのいかなる古代の先例も存

¹²⁰ Marcus Terentius Varro Lucullus (c.BC 116-c.BC 55)。ローマの将軍、政治家。富豪L・ルールクスの弟。閥族派の主導的人物で、キケローの友人でもあった。

¹²¹ [原注]『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』、34頁参照。

¹²² アテテーゼン (Athetesen) は、ギリシア語の ἀθέτησις (除去、破棄、抹殺、廃止) に由来し、「伝承された異文の棄却」(Verwerfung einer überlieferten Lesart) を意味する。Bernhard Kytzler, Lutz Redemund, Nilolaus Ebert, *Unser tägliches Griechisch. Lexikon des griechischen Spracherbes* (Mainz am Rhein: Verlag Philipp von Zabern, 2001), 96.

在しないところでは、われわれは否定的判断においては、古代人よりもより一層慎重でなければならないであろう。われわれはつねに伝承から出発して、そして1つの書物の起源に対する嫌疑なき積極的な証言が、結合的批判によって真実であることが立証され、完全なものにされるかどうかを、試してみなければならない。判断が何らかの仕方であらゆるところでは、次の原則が当てはまる。すなわち、「いかなる書物も、その反対が証明されるまでは、真正と推測される」(Quivis praesumitur genuinus liber, donec demonstretur contrarium)。

IV. 種類の批判

§ 36. われわれは、個人的批判が種類の解釈を前提することを見た(原著212頁)。しかしこのことはふたたび種類の批判の助けを借りてのみ完成され得る。というのは、個々の文字作品の芸術規則が、この文字作品自体から規定される以上は(原著143頁を見よ)、解釈は分析の近似的進行において、個々のものにおける多くのことは部分的に突きとめられた全体の目的に矛盾するように思えるという事態によって、妨げられざるを得ない。これをもって種類の批判の第1の課題が浮かび上がる。著作がその芸術的規則に実際にふさわしいか、それともそうでないかが、調べられるべきである。しかしもしこの芸術的規則が、文字作品のすべてのグループの比較によって見出される、一般的な文学的ジャンルの性格からさらに導き出されるべきであるとすれば(原著143-144頁を見よ)、批判はより強烈に解釈のなかに介入する。というのは、あらゆる文学的ジャンルは1つの理想を形づくるが、個々のその代表者は多かれ少なかれつねにそれから逸脱するのであり、それゆえひとはつねにジャンルの規則を規定する際に、ジャンルの真の本質に反するものを考慮に入れないよう、注意しなければならない。芸術は概念では捉えられず、真の芸術家の内的感情から発現してくるので、それゆえ正しい尺度はここではとくに獲得するのが難しい。ジャンルの規則は生き生きとした適用においてのみ、すなわち本物の芸術家自身

の活動においてのみ、捉えられる。ところで、真の芸術家は生産のあらゆる瞬間に、みずからにその規範を指示すると同時にそれに従うが、しかしこの規範が自分の血肉へと移行しなかった場合には、異他なる指示にしたがって働くことができない。これによれば、天才（Genie）自体がジャンルの規則であるので、種類の批判は、ひとが著作のなかにある天才の働きと、天才の働きではないものとを区別する能力がある、ということにかかっている。しかしまた天才の本質は、いかなる定式においても汲み尽され得ない。天才および美の理念は、神の理念と同じように、理性と人倫にとって、なるほど明瞭ではあるが、しかし決して外的に演繹され得ない直観であり続ける。しかしながら、この直観が種類の批判における尺度であるべきだとしても、ひとはそれについて了解するためには、それによってあのいわく言い難いものが、つまり想起のための一般的輪郭が再生産される、そのような一定の概念を必要とする。これが理論の規則であるが、このような理論の規則は、体系のなかで固まらないためには、天才の働きから抽出され、学問的精神によって結合され、生き生きと保持されなければならない。そのような理論の最初の偉大な模範がアリストテレスの詩学である。理論的規則が抽象的に考え出されることができないということは、天才の本質から帰結する。というのは、天才はまったく個人的だからである。つまり、普遍的なものの特的なものは天才において1つになっている。しかし普遍的なもののみが抽象的原理から導き出され得るのである。それゆえ、古代もまた近代とは違う理論をもっているのであるが、それは2つの時代における天才が異なった形態で現れているからである。概念的にはひとはこの差異をいわば輪郭的に描くことができる。しかしひとはそれによってただ空虚な幾何学的図形を保持しているにすぎず、この幾何学的図形はまず芸術作品の直観によって満たされなければならないのである。ところで、これにしたがえば、ひとは種類の批判の尺度を種類の解釈のうちのみ見出すのであり、また種類の解釈が、それ以外の種類の批判と解釈学の結節点をふたたび形づくるところの、個人的批判の前提であるので（原著 215 頁を見よ）、そのことによって種類の批判もまた、他のすべての文献学的機

能との恒常的な相互関係のうちにある。1つの著作が、個においてあるいは全体において、その芸術的規則にふさわしいかどうか、ということに関する判断は、それにしたがえば、最も厳密かつ最も多面的な研究に基づいてのみ言い渡すことができる。目の前にあるものがふさわしくない場合に生ずる批判の2つのさらなる課題は、しかしここでは個人的批判の場合(原著210-211頁を見よ)と違って、決して重なりはしない。というのは、あらゆる作家は実のところ、みずからの著作の個人的な芸術的規則に対して、違反することがあり得るし、同様に、言語法則と歴史的真理に対して、違反することがあり得るからである。ひとはそれゆえ、現実的な不調和に出くわす際には、何が原初的であったのかをそのあとそれにしたがって突きとめることができるためには、目下の場合には何がよりふさわしかったかを、つねにまず調べるであろう。何が原初的であったかは、個人的批判の助けを借りてのみ突きとめることができる。これについて非常に詳しく述べる必要はない。

種類の批判は文学自体のさまざまなジャンルのなかにさまざまな性格を仮定する。ひとは区分根拠を文字作品の執筆材料から手に入れて来て、例えば「石碑の批判」*Critica lapidaria*と「貨幣の批判」〔*Critica*〕*nummaria*を区別するようなやり方(ドナトゥス編『古代の碑文の新宝典への補遺』に収録されているマッフアイの「現存する石碑の批判の技術」¹²³参照)で、まったく外的な徴表にしたがって文学のジャンルを引き裂くことだけはやってはならない。この種のを批判の固有の種類として際立たせることは、細かい事実にこだわる粗雑な知識のひけらかしであって、もし文献学が学問の名に値すべきであるならば、ひとはこれから完全に身を切り離さなければならない。文献学的な諸機能の特徴にとって、その実行の対象となる文字が石で伝承されているか、あるいは紙で伝承されているかは、

¹²³ Scipione Maffei, "Artis criticae lapidariae quae extant," in *Ad novum thesaurum veterum inscriptorum Ludovici Antonii Muratorii supplementum*, ed. Sebastianus Donatus, 2 vols. (Lucae, 1765).

どうでもよいことである。そこから一般的法則の適用において特殊な事情が生じることはもちろんであるが、しかしこれは古文書学的批判の外的変異に過ぎない（原著 188 頁以下を見よ）。これに対して、文学の諸ジャンルは種類の批判に対する本質的な区分の根拠を含んでいる（原著 144 頁以下を見よ）。散文的著作の批判は、詩的文学の批判とはまったく異なる精神で、またそれとは異なる視点にしたがって、事柄を処理する。たしかに後者において、それに対応する散文の 3 つのジャンルの批判と同じように、叙事詩、抒情詩、演劇についての批判が区別されるが、しかしこれらはとりわけ特殊な名前で表示される習わしとなっている。つまり歴史的批判、修辞学的批判、そして学問的批判である。この意味での歴史的批判は、実際の歴史的諸条件にしたがっている様々な文字作品を測定するところの、あの歴史的批判（原著 207 頁を見よ）からは区別されている。というのは、こちらの方の歴史的批判は、いろいろな文字作品が歴史的技法の形式と内容にしたがって適切であるかどうかを、むしろ調べるからである。修辞学的批判は——ハリカルナッソスのディオニューシオスが証明するように——、古代において見事な仕方で行われたが、これは歴史的批判と同じように、もちろん単に固有の演説のなかにのみ現れるのではないところの、修辞学的技法を判断するものであるが、歴史的批判がそうであるように、歴史的著作に限定されてはいない。最後に、学問的批判は哲学と個別的学問のなかで表現された形式と、あらゆる文字作品の収集された素材とに関係し、その真の内容とその真理性の度合いを問うものである。というのは、真理の探究は哲学的技法の目標だからである。われわれは種類の批判の種類にとくに細かく立ち入ることはできない。わたしとしては、例として若干の点を際立たせておこう。

1. 詩的批判の 1 つの側面は、韻律的批判であって、これは詩の外的形式の最も重要な部分に関係する（原著 154-155 頁を見よ）。韻律論の法則は、それによってひとが個々の詩歌の判断のための確固たる基準をもてるように、一度きり与えられているわけではない。しかしながら、この法則は韻律の発見によってすでに古代においても見出されていたが、韻律は芸術を

実際に営むなかで最初に形づくられたのであった。われわれはそれにしたがって韻律的形式に関する古い伝承をもっており、われわれはそれに結びつかなければならない。こうした伝承は批判にとって外的証言の価値をもっている。しかしそれらは非常に一般的な性質をもっているので、著作の分析によって補完されなければならない。それを通して個々の詩歌およびジャンル全体の韻律は、ようやく厳密に確定されるのである。とはいえ、このことは、目の前にあるそれぞれの場合に韻律の原初的な形式はいかなるものであったのかを、批判が内的根拠にしたがってまた結合によって絶えず突きとめることによるのみ、起こり得ることなのである。韻律的批判がテキストの古文書学的判断にとって、したがってまた爾余のあらゆる種類の批判にとって、とりわけ文法的批判にとっていかに重要であるかが、ここにおいて示される。というのは、もし1つの異文が韻律的形式に合致していなければ、ひとはそれを正しくないものと見なすであろうからである。もちろん、ここで原理の請求 (*petitio principii*) が非常に容易に起こる。それというのも、ひとはたしかに韻律的形式そのものを、しばしばいろいろな所与の異文に基づいてのみ規定することができるのであり、そしてもしひとがそこで間違ったテキストにしたがえば、ひとは正しくない結論へと到達し、その後その正しくない結論にしたがって、おそらく正しい異文が何の根拠もなしに変更されるからである。例えば、ヘーシオドスの『神統記』や『イーリアス』における船のカタログにおけるように、カタログ然とした叙事詩の場合に、ひとは5行のペリコーペを仮定する。しかしこの形式を貫徹するために、若干の詩句が挿入として排除されるようなことがあってはならない。例えば、もしたびたび5つの詩句が1つの思想的区切りを形づくるという理由で、ひとがいまペリコーペの形式を規則として設定し、しかるのちそうでなければ規則が貫徹され得ない、つまりまさに規則であり得ないとの理由で、ある詩句を挿入されたものとして落とすとすれば、これは原理の請求 (*petitio principii*) である。落とされた詩句がまた韻律を顧慮せずに真正ならざるものとして証明され得る場合には、原理の請求は回避される。しかしペリコーペの形式の仮定は、思想の区切り

が一定の詩句の数と単に偶然的ではなく重なることができるときにのみ、基礎づけられたものとなる。ゴットフリート・ヘルマン『ヘーシオドスの神統記の最も古い形式について』¹²⁴を参照されたい。ラッハマン（『古代学時報』1845年、461頁；『古典文献学のための小論文集』第2巻¹²⁵、84頁）とマイネケ（彼のホラーティウスの版¹²⁶の序）によって試みられているように、4行の詩節（Strophe）におけるホラーティウスの頌歌の区分も似たような状況にある。デーダーライン『公開演説』¹²⁷、403-404頁参照。

2. 散文では韻律に数（Numerus）が対応している。数はすべての外的形式と同様、内的形式と思想的結合に依存している（原著154-155頁を見よ）。韻律が詩のジャンルと目的によって異なるその下位の種類にしたがって区別されるように、数は散文の3つのジャンルとその下位区分にしたがって区分される。後者に関しては、例えば勸告の種類（γένος συμβουλευτικόν）、祭典の種類（[γένος] πανηγυρικόν）、法廷の種類（[γένος] δικαιοκόν）という弁論術の部門における数は、ディテュラムボス¹²⁸、賛辞の詩、挽歌等々のいう抒情詩の部門における韻律と同じように、幅広く相互に分かれている。しかしそれに加えて、数および韻律において思想的結

¹²⁴ Gottfried Hermann, *De Hesiodi Theogoniae forma antiquissima* (Leipzig: Staritz, 1844); abgedruckt in *Opuscula*, Bd. 8 (Leipzig: Ernest Fleischer, 1877), 47-67.

¹²⁵ Karl Lachmann, *Kleinere Schriften zur classischen Philologie*, herausgegeben von Johannes Vahlen (Berlin: G. Reimer, 1876).

¹²⁶ Q. *Horatius Flaccus*, herausgegeben von Augustus Meineke (Berlin: Reimer, 1834).

¹²⁷ Ludwig Döderlein, *Oeffentliche Reden mit einem Anhang pädagogischer und philologischer Beiträge* (Frankfurt am Main und Erlangen: Verlag von Heyder & Zimmer, 1860).

¹²⁸ δειθύραμβος. デイテュラムボスとは、紀元前7世紀頃に酒神ディオニユスをたたえてその祭典で酔っぱらいたちによって歌われた即興の歌であったが、紀元前600年頃からは詩の一種として発展し、その韻律や用語などは抒情詩と非常に類似していた。

合の性格が表現されており(原著151頁以下参照)、その相違が倫理的な文体形式なのである。古代人たちはこの文体形式(*ιδέαι*)を3つのジャンルに遡源していた。すなわち、崇高ないし厳格な叙述方法(*γένος σεμνόν*, *genus grave*)、上品ではあるが軽やかであっさりした叙述方法(*γένος λιπόν* *od. ισχνόν*, [*genus*] *subtile oder tenue*)、および中間のあるいは両者から合成された叙述方法(*γένος μέσον* *od. σύνθετον*, [*genus*] *medium*)である。叙述方法は時代精神がジャンルの性格に及ぼす影響から生ずるので、同一の時代には文学のジャンルだけでなく、芸術一般のジャンルも共通の叙述方法の性格をもっていることを、わたしはすでに示唆しておいた(原著137-138頁)¹²⁹。その場合、個人的な色彩が(原著136頁を見よ)修正的に付け加わる。批判の課題は、文体形式の理想に関して、外的形式全体との結合において、数の形式ならびに韻律の形式を調べることである。しかし同時に、様式的規則はふたたび批判の助けを借りてのみ、目の前にある作品から抽出されることができる。このように、歴史的な文体学は文法学の補完として形成されるが、これは韻律および数の理論とともに包含しており、そしてその基礎をなすのが文学史である(原著156頁を見よ)。さて、もし文体の種類一般に関するわれわれの知識がなお非常に欠けているとすれば、このことはとくに散文的文体の理論について言える。散文的文体は古代では主として修辞学のなかで発展した。そしてすでにヘーロドトスにおいて、その歴史叙述は修辞学的である¹³⁰。しかし近代において修辞学的研究が蔑ろにされたために、古代の著作家の文体的洗練に対する感覚が、われわれから失われてしまった。もし歴史的にこれに立ち入ろうと欲するのであれば、ひとは古代の理論の伝承に結びつかなければならないが、ここではとりわけハリカルナッソスのディオニューシオスが最良の資料として推薦されるべきである。ひとはいましがた述べられた叙述方法の

¹²⁹ [原注]『小品集』第7巻, 595頁参照。

¹³⁰ [原注]『小品集』第7巻, 596-597頁参照。

主要な相違から出発し、そしてそれを際立った模範に即して学ばなければならない。さてその場合、数の考察が主要な契機になるであろう。しかし誰がそれについて真の概念をもっているであろうか？ 散文におけるあれやこれやのリズムがいかなる印象をもたらすかを、誰が規定することができるであろうか？ 数に関するすべての種類の批判は、初期段階の最初に位置しているが、しかし韻律的批判そのものと同様、文法的批判にとっても重要である。ひとは今日に至るまで、すべての問いにおいておぼろげな感情にしたがって判断するが、これに対してディオニューシオスはすでにこの感情を概念において捉えようと努めた。もちろん、すべてのことはひとがこの感情を認知された模範によって形づくりに懸かっている。さて、最も完全な数は古代人たちの一致した判断にしたがえば、あらゆる文体の種類を支配するデーモステネースにおいて見出される。ここでひとはみずからの耳を訓練し、そのあとで他のものを調べなければならない。そのとき例えば、プラトンの雄弁的書物のなかには、必ずしも正しい散文的な数がないということを、ひとは見出すであろう。しかしここでは、批判がいかに初歩的になお適用されているかが、ただちに示される。ゴットフリート・ヘルマンは『パイドロス』における演説を、その数ゆえに捜し求められた詩句のつぎはぎ細工と見なしたが¹³¹、一方古代人たちはすでにまったく正しくその根拠を、件の演説のディオニューソス賛歌的な性格のうちに見ていた。『饗宴』においても、アガトーン演説がいろいろな詩句からはぎ合わせて作られているとの不幸な考えに、ひとは出くわしてきた。そしてその場合にこれに関して、その「韻律ゆえに」異文が変更されることは当然だと思われる¹³²。真実のところは、プラトンは数に非常に習熟していたが、しかししばしば意図的に間違ったリズムを適用した、例えばデーモクリトス派のプロータゴラスにおけるように、ときには嘲笑やイロ

¹³¹ [原注] 『小品集』第7巻、414頁以下参照。

¹³² [原注] 『小品集』第7巻、139頁参照。

ニーから。トゥーキューディデースも織り込まれた演説のなかで、みずから演説者の数を模倣している（原著155頁参照）¹³³。その類いのものが種類の批判の対象であるが、種類の批判はそのような産物の性質に関する結果を得、それを見出されるべき文体規範あるいは理念にしたがって判断しなければならない。ヘーロドトスの場合には、ひとはつねに表現における単純さのみについて語るが、しかし数の性格には注意しない。古代の数の理論についての基礎は、ふたたび古代人たち自身のところで見出される。ここではひとはアリストテレスから出発しなければならない。アリストテレスは、『弁論術』第3巻8-9において、文章構成の2つの最高の相違に関する古典的議論を提供しているが、数は究極の根拠においてはそれに依存している。その相違は直進的言語表現（λέξις εἰρομένη）と回帰的言語表現（λέξις κατεστραμμένη）である。前者は、単にゆるやかな文から連結されたもので、叙事詩的、ヘーロドトス的言語表現であり、アリストテレスはこれをディテュラムボスのアナボレー（ἀναβολαί）¹³⁴と比較している。もう1つは周期的な言語表現で、彼は適切にもこれを抒情詩家のアンティストロペー¹³⁵の構文と並置している。ところで、ひとが単語の位置から数を導き出そうと欲するのであれば、ひとはそれから声調（sonus）を区別しなければならない。声調は音による強調の特有の種類に存しており、それゆえアクセントの本質、すなわちメロディーの本質をもっており、リズムの本質をもっているわけではない。したがって、それは数とは異なる仕方文章構成に依存している。それというのも、後者は単語の位置の韻律的側

¹³³ [原注]『小品集』第7巻、597頁参照。

¹³⁴ ディテュラムボスにおける序歌であったが、詳しいことは知られていないという。

¹³⁵ アンティストロペーというのは、ギリシア語のアンティストロポス（ἀντίστροφος）に由来し、抒情詩の合唱隊歌においてストロペーに対応して歌われたものである。ちなみに、ストロペーとは古代ギリシア劇の合唱隊の左旋回のこと、そこからこのときに歌う合唱歌の第1連を意味する。

面に関係しており、論理的側面には関係していないからである。けれども、両者はメロディーとリズム一般のように、最も密接に結びついている¹³⁶。わたしはここで少なくとも散文的リズムの最高の相違に注意を喚起しようと思う。この相違は同時に文体全体にとって代表的だからである。数の1つの形式は力、堅実さ、芯の強さという特徴を帯びている。こちらの方はアッティカ人たちのあいだで最も完全に浮かび上がった。他方は弛緩し、女性的で、芯がない。後者においてはすべてのものは崩壊し、相互に沈んでいく。これに対して最初に名づけられた文体においては、すべてのものはしっかりと結び合う。ひとがここで見出す充填と絆の代わりに、〔後者においては〕すべてのものは緩んでいる。言語要素は、筋肉を連結する人体がはずれるか弛んでしまった人間のように、びっこを引きながら互いの後ろからついて行く。これは疑いなくアジア風文体の性格であった。そしてその土台をなしているのがヘーロドトス的文章構造である。但し、ヘーロドトスの文体は中間的性格を帯びており、そこにおいては数の柔らかさは、より大きな部分が力強く面取りされることによって、緩和されている。マグネシア出身のヘーゲーシアース¹³⁷ほどアジア風文体をしっかりと、しかしまた間違って発展させた人はいなかった。ストラボンやディオニューシオスはそれゆえ彼を正当にも非難する。というのは、実際批判はこの場合、文体の特徴を確定しなければならないだけでなく、それをまた不適切なものとして証明しなければならないからである。われわれはアジア風文体形式を、同郷人のヘーゲーシアースの執筆方法を模倣したパウサニアースの作風からのみ、いまでもより正確に学ぶことができる¹³⁸。

¹³⁶ [原注]『ピンドロスの韻律について』、第9章「演説のリズムについて」de rhythm sermonis, 51-59頁参照。

¹³⁷ Hegesias, Ἡγησίας (生没不詳)。リューディアのマグネシア出身の弁論家、歴史家。ゴルギアースの華麗な散文を発展させて、さらに装飾的・技巧的な「アジア風」文体を創始したとされる人物。

¹³⁸ [原注]「パウサニアースのアジア風文体について。1824年の講義カタログ

オリジナルな文体 (Stil) を作風 (Manier) から区別することは、種類の批判の主要な課題である。ギリシア人やローマ人のあいだの最も古い著作家たちは文体をもっているが、近代人はほとんど作風しかもっていない。文体は自然であり、その時代の教養、状況、および個人的な性格から生まれる。たとえそれが人為によって形成されるとしてもである。それはヘーロドトスにおいてすら真実である。しかしのちの人々は古い文体を模倣するために、その文体を制約していた状況がもはや存在していなかったにもかかわらず、無理をして、そしてあたかも針で刺すようにくり抜いてきた。彼らはそれゆえ自分自身の本質に逆らって書いてきたのである。そのことによって彼らは、たとえときおりきわめて卓越した技量をもってであったとしても、作風的なものしかもたらさなかった。第2のデーモステネースと見なされたアリスティデース¹³⁹や、あるいは父親が非常に力を入れて教育しようとしたため、雄弁においてすべての古代人を凌駕したヘーロデース・アッティクス¹⁴⁰がそうである。ルーキアーノス¹⁴¹はヘーロドトスを模倣した同時代人たちを嘲笑した(ディオニューシオスの『文章作成について』第4巻への解釈者たちを見よ)。しかしかなり多くの批評家たちは、自然と人為の区別の仕方を知らず、そして彼の時代が行ったように、フロントローをキケローと同じほど非常に素晴らしいと見なす。この種のものに対

グへのプロオイミオン」*De Pausaniae stilo Asiano*. Prooemium zum Lektionskatalog 1824 (『小品集』第4巻, 208-212頁) 参照。

¹³⁹ [ラ] Publius Aelius Aristides Theodorus [ギ] Ailios Aristeides, Ἀἴλιος Ἀριστείδης (118-181以降)。ローマ帝政期のギリシアのソフィスト・修辞学者。

¹⁴⁰ Herodes Atticus, Ἡρόδης ὁ Ἀττικὸς (c.101-c.177)。ローマ帝政期のギリシアの学者、弁論家。雄弁家として名声を馳せ、アテーナイやローマで教え、ハドリアヌスをはじめ、マルクス・アウレリウス、ルーキウス・ウェールスなどの諸帝の知遇を得た。

¹⁴¹ [ギ] Lukianos, Λουκιανὸς Σαμοσατεύς [ラ] Lucianus Samosatensis (c. 120/125-c.190/195)。ローマ帝政期のギリシアの風刺作家、弁論家。

して眼識をもつ人は、いたるところに作風の道化帽が覗くを見る。オリジナルな文体は、現実の状況によって生み出される、何らかの感激から生まれる。感激を与えるような状況が欠けているにせよ、あるいは精神ないし天才そのものが人間のなかに存在しないにせよ、作風はそのような感激なしに模倣するのである。

3. 種類の批判は単に文字作品の形式だけでなく、その内容をも判断しなければならぬということは、すでに述べたところである（原著 243 頁）。要するに、その内容が芸術規則、つまり目的に合致しているかどうかを決定するためにである。ところで、内容が真実であるということは、あらゆる文学的ジャンルの共通の理想である。詩歌は詩的な真理を、すなわち、イメージと芸術的理念との一致を得ようと努める。これに対して散文は現実的真理を、すなわち、内容と実際の現実との一致を目標として持つべきである。後者は学問的散文における最高の視点であり、そして歴史的叙述および修辞学的叙述は、学問的基礎づけ——修辞学にとっての学問的基礎づけには、プラトンがはじめて『パイドロス』と『ゴルギアース』において迫った——を仮定することによってのみ、それに等しい目標に到達する。それゆえ、個々の著作がどの程度真理に合致しているかを調べるとき、批判は個々の著作を学問的理想によって測定しなければならないが、かかる理想は知識の一般的連関ゆえに、完成された学問体系のうちのみ与えられていることができる。しかしながら、この種の完成された体系は決して存在しない。万有の無限の内容は決して完璧に捉えられることはなく、またたとえ研究者が事柄の本質に完全に到達するために、みずからの人格性を脱ごうとどんなに努めようとも、人間的把握の形式はつねに主観的に脚色されている。しかしたとえすべての学問的研究者が真理を一面的かつ部分的にのみ認識しようとも、認識は学問の発展のなかで進捗し、そしてそこにおいて徐々に確実な知識の根幹が明らかになる。そして真理と確実性の度合いをそれにしたがって区別することが可能となるような、論理的原則、つまり方法的原則もまたこの確実な知識の根幹に属している（原著 175-176 頁を見よ）。したがって、ひとは古代の精神的著作の真理を古代あ

るいは近代の個々の知識の体系にしたがって測定することはできず、むしろ学問的精神の個々の表出を、著作そのものの分析を通して、まずその固有の特徴において理解しようと努め、そして内在的批判を通じてその内的首尾一貫性を調べ、しかるのちあらゆる著作の内容を比較することによって、各々の業績に対する基準を生み出す学問の歴史の全経過を突きとめなければならない。

ひとはここから同時に、あらゆる学問の研究そのものが、そこに存在している業績の批判を通して、自然と進展するであろうことを見る。学問に根本的に精通している人はすべて批評家である、という上で述べた命題(原著172頁)は、このことを言っているのである。逆に、もしひとが学問そのものをその生き生きとした働きにおいて知らないとするれば、ひとは学問的批判に対する正しい基準を獲得することができない。直接的認識は批判によって、そして批判は直接的認識によって補完される(原著66-67頁を見よ)。哲学においては、プラトンのような偉大な研究者は、先行する体系に対して歴史的批判を行使することによって、より高次の真理へと突き進んだのである。しかし各々の体系はそれによって与えられた発展段階のなかのいかなる段階を占めるのか、神的なもの、つまり真理の完全な理念はどの程度それぞれの業績において表現へともたらされたのか、それを哲学のすべての歴史から、つまり哲学的精神のすべての発展から規定するためには、文献学者はみずから哲学的教養を積まなければならない。

哲学の歴史との連関において、個別科学の歴史が似たような仕方で、それぞれの領域に存在する文字作品の検査のための基準を生み出す。しかし哲学の歴史は詩歌の歴史によって補完されなければならない。というのは、詩歌もまた象徴において理念が発展したものであり、かかる象徴は明瞭性と深さのさまざまな程度をうちに蔵しているからである。それゆえ、文学作品のなかに神的なものがいかに反映されているかが、また調べられるべきである。ひとはこれを概念的に認識するか、あるいは少なくとも感受し感じることによって、恒常的な相互作用のうちにあるところの、学問と詩歌との連関への洞察を獲得するのである。しかしながら、ひとは

ここに立ち止まり続けることはできない。というのは、すべての芸術のうちに、ならびに国家性格や個人生活のうちに、理念は自己を表現しているからである。すなわち、理念は間接あるいは直接に学問の発展に作用を及ぼしてきたので、学問の発展は文化史全体の連関のなかではじめて完全に理解できるものとなるのである。種類の批判はしたがって、古代学のすべての実質的学科を前提するのである。

美が単に外的形式においてではなく、とりわけ内的形式において表現へともたらされなければならないかぎり（原著 147 頁を見よ）、詩においては詩的な真理が、散文においては学問的真理が、美を根本的に条件づけるものである。例えば数学的研究は、もしそれが完全に正しくはないとすれば、美しいと呼ばれることはできない。しかしそれは次のような場合にかぎっては、もちろんまた美しいといえるであろう。すなわち、数学的学問の性格と一致するような仕方、そこにおいて形式が内容と結び合わされている場合である。これは言語が修辞学的に飾られているときには、その通りにはならない。ところで、種類の批判の最高の課題は、内容と形式がその結合においてジャンルの内的目的に適切であるかどうかを調べることであるので、この意味での種類の批判は一般的に美的な批判と表示され得る（原著 156 頁を見よ）。種類の批判は文学のすべてのジャンルに関係するので、それは文学的批判と重なり合うように見えることもあり得るであろう。しかしながら、文学のあらゆるジャンルに関係するということは、文字作品についてのあらゆる種類の批判一般に共通している。そして文字作品についてのあらゆる種類の批判は、他の資料の批判や事実の批判と異なって、文学的と表示されなければならない。実際、われわれによって論じられた 4 種類の批判もその全体性においては、ひとが通常の言語の慣用で文学的批判と名づけているもの、そして近代的意味での書評（Recensionen）の課題と見なしているものにほかならない。完全な書評はその言語、その歴史的諸前提、著者の個性、そしてその文学的ジャンルの要求に関して、学問的著作の場合には、とりわけ到達された真理と書物のなかに含まれている学問的業績に関して、書物という性格を表わさざるを得ないし、またそれ

を評価しなければならない。それゆえ、ここで批判のすべての問題が解決されるべきである。しかしこの課題に部分的にのみ注視する文学的判断もまた、それにもかかわらず、多面的な研究に基づいてのみ成功することができるので、明らかにごく少数の書評のみがこの名前に値する。通常の表面的な書評、他者の業績についての軽薄な有罪判決は、軽はずみなものとして斥けられるべきであり、そしてわれわれの時代の最悪の損害に属する。しかし優れた書評はあらゆる文学の発展にとって、そして恒常的な自己批判を必要とするところの、われわれの文献学的な学問にとってまったく特別な仕方では、きわめて重大な意義を有している¹⁴²。

§ 37. 方法論的補遺

われわれによって提起された批判の理論が、もし実際に真実であると実証されるべきであるとすれば、3つの批判的課題をすでに述べたような自然な順序でつねに注視することが、この理論にとっての第1の規則とならなければならない。ひとは最初から校訂やあるいは^{アテテゼン}廃棄 (Athetesen) を狙っては決してならず、むしろとりわけ最初は所与のもの^の完全な理解に到達するよう努めなければならない。真の疑り深い意識 (animus suspicax) (原著 173-174 頁を見よ) は、それにしたがえば所与のものが不適切なものと思われる場合に、ひとがまず自分自身の解釈を不信するところに示される。初心者は批判一般を解釈学に奉仕する仕方でのみ行わなければならない。さらに、文法的批判と歴史的批判がまず行われなければならないが、それはそのための基準がより確かであるのと、判断が伝承された個別の事項から出発するからである。これに関する最良の学校は碑文であって、そこでは判読による校訂はより少ない数の可能性に制限されている。もし韻律がしっかりしていれば、詩歌の場合も同様である。文法的批判にとっては、言語そのものを批判的に支配することが肝要である。これはみ

¹⁴² [原注] 『小品集』の第7巻は、1808-1848年間のパークの書評を24編含んでいる。

ずから言語を使用して書く訓練をすることによって、本質的に促進される
ところである。最も難しい種類の批判は個人的批判である。そこにおいて
自立的に先に進むためには、ひとは文法的批判および歴史的批判における
徹底的授業を修了していなければならないだけでなく、そのためには一般
に卓越した度合いの批判的明敏さと、またより重要な課題を扱う際には、
書物の隠された奥義への深い滲入、文体的類似性と相違を発見するための
非常に繊細な感情、非凡な眺望、そして批判的に検証された多くの知識が
必要である。種類の批判でさえこれよりは容易である。というのは、文学
的ジャンルの性格は著作家の個性よりも客観的で、確固としており、また
規則的だからである。それゆえ、個人的批判は種類の批判よりもはるかに
特殊かつ間接的であり、したがって種類の批判のあとで訓練されなければ
ならない。

批判的訓練の主要な補助手段は優れた模範である。これは口頭による注
釈において最も完全に与えられる。というのは、そこにおいて批判は最も
合目的な仕方では解釈と結合され得るからである（原著 162-163 頁を見
よ）。口頭による注釈はすべての批判的装置を正しく利用することへと導
かなければならないが、このような批判的装置は、上で（195 頁）言及され
たすべての異文の証言と、それに基づいてすでに行われた批判的試みと
から成り立っている。この装置はたしかに解釈学的装置を本質的に補完す
るものであるが（原著 168 頁を見よ）、しかし完全には文字的注釈と結合され
ることができない。ひとは最も信頼できる異文にしたがってテキストを組
み立てることを、さしあたりいたるところで詳細に基礎づけることはでき
ない。むしろ序論あるいは特別な論文のなかで、テキストの歴史による一
般的な基礎づけが与えられるべきであろう。そしてそのあとで大抵の場合
に、組み立てられたテキストから逸脱した異文を、程度の差はあれ、完全
に引き合いに出せば十分である。テキストそのもののなかに据えられたい
ろいろな校訂や、もっと多くの判読による本文批判は、さらにしばしば特
殊な基礎づけを必要とする。この基礎づけはたしかにできるだけ簡潔でな
ければならないが、しかしときには積義的注釈と批判的注釈を分離するこ

とが必要である。より難しい批判的な問い、とくに個人的批判と種類の批判は、書物の序論においてか、あるいは自分自身の論文において議論されるべきであろう。著作の批判版は、そのなかにそれ以前のすべての批判の業績が見通しのきくようにまとめられていなければならないほど、ますます啓発的である。その場合校訂に関しては、より古い批評家がしばしば非常に刺激的であり、それゆえ彼らを蔑ろにしてはならない。16世紀にはとくにランビヌス、ムレトゥス、ヨーゼフ・スカリガー、およびあまり知られていないが、非常に若死にしたアキダリウスが聳え立っている。さらにラテン著作家の批評において卓抜なユストゥス・リプシウスと、ギリシア語に関して非常に功績のあるヘンリクス・シュテファヌス¹⁴³がいる。17世紀にはニコラウス・ハインシウス¹⁴⁴が素晴らしい批評家であった。但し、彼は判読による本文批判を沢山やりすぎた。例えばそのリウウィウスの版が大きな解釈学的価値をもっているヨーハン・フリードリヒ・グロノウィウスは、批評家としてはあまり重要ではなかった。しかしながら、17-18世紀に校訂的批判はベントリーにおいてその頂点に達した。彼のホラーティウスの版は、批判的技法の最も完璧な傑作に属する。パリスの書簡に関する彼の論文が証明しているように、彼は本物と偽物の批判においても卓抜であった。詩人の批評において、彼は韻律についての驚嘆すべき知識と、非常に繊細かつ深い感情を示しているため、彼はあらゆる方面に刺激的に作用してきた。批判的な才能の大きさという点では、彼に匹敵する人は誰もいない。18世紀の偉大なオランダの批評家たちが彼に続いた。ヘムステルホイス、ヴァルケナル、ルーケン、ヴィッテンバハである。例えば、ルーケンによるウェッレイユス・パテルクルスの版は最も重要な模範の1つである。英国においては、同時期であればとくに、校訂しようとの欲

¹⁴³ Henricus Stephanus (1528/31-98)。フランス名は Henri Estienne。16世紀フランスの印刷屋、古典学者。

¹⁴⁴ Nicolaus Heinricus (1620-81)。オランダの古典学者。

アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』（安酸）

望を追求しすぎたとはいえマークランド¹⁴⁵，ドーズ¹⁴⁶，テウルホイット¹⁴⁷，そしてギリシア悲劇作家の批評に抜きんでてたポーソン¹⁴⁸が屹立していた。個人的批判と種類の批判は，ようやくレッシング以来，徐々にその真の意義において理解されるようになった。個人的批判はフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフの『ホメーロス序説』¹⁴⁹（1795）とシュライアマハーのプラトンの対話篇への序論（1804以降）¹⁵⁰によって，種類の批判はフリードリヒ・アウグスト・シュレーゲルによって，最も重要な刺激を受け取った。同時に，われわれの世紀〔19世紀〕における古文書学的批判は，I・ベッカーの画期的業績以来，徐々にそれにふさわしい方法へと到達し，その結果いまではすべての批判的活動は，安定した基盤の上で建設し続けることができる。近年に生じた文学の専門雑誌の興隆は，批判的作業にとってとくに役立つようになり，それによって獲得された研究結果の速やかな伝達と，かくして批判的研究者の一般的な協力が可能となっている。もちろんそれによって，みずから何かを達成することができる前に，未熟な研究を市場に持ち込み，そして他者の業績にけちをつけようとする誘惑も高まっている。けれども，こうした悪しき状態は，雑誌そのもののますますの発展によって，調停されるであろう。というのは，きわめて有能な力ある方々がますます雑誌に関与しているからである。

¹⁴⁵ Jeremiah Markland (1693-1776)。イギリスの古典学者。

¹⁴⁶ Richard Dawes (1708-66)。イギリスの古典学者。

¹⁴⁷ Thomas Tyrwhitt (1730-86)。イギリスの学者。アリストテレスの『詩学』など古典的著作家の著作などを編集。

¹⁴⁸ Richard Porson (1759-1808)。イギリスの古典学者。ケンブリッジ大学教授。古代ギリシア語に精通し，多くの校訂本を作成した。

¹⁴⁹ Friedrich August Wolf, *Prolegomena ad Homerum sive de operum homericorum prisca et genuina forma varisque mutationibus et probabili ratione emendandi* (Halle: Orphanotropheus, 1795).

¹⁵⁰ 第一部の注 230 を参照のこと。

[最も重要な一般的な文献学のジャーナルは、現在では、フレックカイゼンとマシウス編『文献学と教育学のための新年報』¹⁵¹。— エルンスト・フォン・ロイチュ編『文献学者 — 古典的古代のための時報』¹⁵²。— 『文献学新聞』(『文献学者』を補完するためにエルンスト・フォン・ロイチュによって編集された)¹⁵³。— オット・リブベックとフランツ・ビューヘラー編『文献学のためのライン博物館』¹⁵⁴。— G・カイベルとC・ローベルト編『ヘルメース』¹⁵⁵。— H・ケルンとH・J・ミュラー編『ギムナジウム制度時報』¹⁵⁶。— W・ハルテルとK・シェンクル編『オーストリア・ギムナジウム時報』¹⁵⁷。— W・ハルテルとK・シェンクル編『オーストリア・ギムナジウム古典文献学雑誌』¹⁵⁸。— A・ドイアーリンク編『バイエルン・ギムナジウム学校新聞』¹⁵⁹。— コンラート・ブルジアン編『古代学の進歩に関する年報』(『古典

¹⁵¹ *Neue Jahrbücher für Philologie und Pädagogik*, herausgegeben von Fleckeisen und Masius (Leipzig: B. G. Teubner, 1831-).

¹⁵² *Philologus. Zeitschrift für das klassische Alterthum*, herausgegeben von Ernst von Leutsch (Göttingen: Dieterich's Verlag, 1842-).

¹⁵³ *Philologischer Anzeiger*. Als Ergänzung zum *Philologus*, herausgegeben von Ernst von Leutsch (Göttingen: Dieterich's Verlag, 1869-).

¹⁵⁴ *Rheinisches Museum für Philologie*, Neue Folge, herausgegeben von Otto Ribbeck und Franz Bücheler (Frankfurt am Main: Sauerländer, 1842-).

¹⁵⁵ *Hermes. Zeitschrift für classische Philologie*, herausgegeben von Georg Kaibel und Carl Robert (Berlin: Weidmann, 1866).

¹⁵⁶ *Zeitschrift für das Gymnasialwesen*, begründet im Auftrage des Berlinischen Gymnasiallehrer-Verinens, Neue Folge, herausgegeben von H. Kern und H. J. Müller (Berlin: Weidmann, 1847-).

¹⁵⁷ *Zeitschrift für das österreichischen Gymnasien*, herausgegeben von W. Hartel und K. Schenkl (Wien: Gerold's Sohn, 1850-).

¹⁵⁸ *Wiener Studien. Zeitschrift für classische Philologie*. Supplement der Zeitschrift für österr. Gymnasien, herausgegeben von Wilhelm Hartel und Karl Schenkl (Wien: Gerold'sche Sohn, 1879-).

¹⁵⁹ *Blätter für das bayerische Gymnasialschulwesen*, herausgegeben von A. Deuring (München: Lindauer, 1865-).

アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』（安酸）

文献学叢書』と古典学のための伝記的年報の付録つき)¹⁶⁰。—『ベルリン文献学協会年報』¹⁶¹。—『古典文献学週報』¹⁶²。—Chr. ベルガーとO・ザイフェルト編『ベルリン文献学週報』¹⁶³。—C・ワグナーとE・ルートヴィヒ編『新文献学評論』¹⁶⁴。—C・G・コベット, H・W・ヴァン・デル・マイ『ムネモシユネー—オランダ文献学叢書』¹⁶⁵。—『古代文献学・文学・歴史学雑誌』¹⁶⁶。—D・コンパレッティ, G・ミュラー, G・フレッチャ『古典的文献学および教育学雑誌』¹⁶⁷。—W・A・ライト, J・バイウォーター, H・ジャクソン編『文献学雑誌』¹⁶⁸。—B・L・ギルダースリーヴ編『アメリカ文献学雑誌』¹⁶⁹。—トムセン編『北欧文献学時報』¹⁷⁰。—これ以外に、よ

¹⁶⁰ *Jahresbericht über die Fortschritte der classischen Alterthumswissenschaft*, herausgegeben von Conrad Bursian. Mit den Beiblättern: *Bibliotheca philologica classica und Biographisches Jahrbuch für Alterthumskunde* (Berlin: Calvary & Co., 1873-).

¹⁶¹ *Jahresberichte des philologischen Vereins zu Berlin* (Berlin: Weidmann, 1875-).

¹⁶² *Wochenschrift für klassische Philologie* (Berlin: Heyfelder, 1884-).

¹⁶³ *Berliner philologische Wochenschrift*, herausgegeben von Chr. Belger und O. Seyffert (Berlin: Calvary & Co., 1882-).

¹⁶⁴ *Neue Philologische Rundschau*, herausgegeben von C. Wagener und E. Ludwig (Gotha: Friedrich Andreas Perthes, 1886-).

¹⁶⁵ *Mnemosyne. Bibliotheca philologica Batava*, Nova series, Colleg. C. G. Cobet, Hendrik Willem van der Meij (Leyden: Brill, Leipzig: Harrassowitz, 1873-).

¹⁶⁶ *Revue de philologie, de littérature et d'histoire anciennes. Nouvelle série dirigée par E. Chatelain et O. Riemann* (Paris: Klincksieck, 1877-).

¹⁶⁷ *Rivista di filologia e d'istruzione classica. Dir. D. Comparetti, G. Müller, G. Flecchia* (Torino: Ermanno Loescher, 1873-).

¹⁶⁸ *The Journal of Philology*, edited by W. A. Wright, J. Bywater and H. Jackson (Cambridge: Macmillan, 1869-).

¹⁶⁹ *American Journal of Philology*, edited by B. L. Gildersleeve (Baltimore, 1880-).

¹⁷⁰ *Nordisk Tidsskrift for Philologi. Ny række*. Red. von Thomsen (Kopenhagen:

り一般的内容の雑誌, とくにアカデミーと他の学術協会の論文集と報告。概観は原著 51 頁で挙げられたクレプス, エンゲルマン, ヘルマン, ルプレヒトによる書誌学的著作, カルヴァリーの『文献学叢書』, および原著 39 頁で引用されたヒュープナーの『概要』のなかに見出される。]

古代の文献学的再構成

§ 38. 文法学, 文学史, および学問史という現実的諸学科が, 言語作品の解釈を通していかにして形成されるかを, わたしは示した。文法学はすべての文献についての文法的解釈によって生み出される (原著 99, 107 頁参照)。しかし種類的解釈が付け加わらなければならない。種類的解釈から最高の文法的理論, つまり文体論が生ずる (原著 245 頁を見よ)。文体論は基盤として文学史を前提するが, 文学史は個人的解釈によって種類的解釈との結合において作り出される (原著 143-144 頁を見よ)。最後に学問史であるが, これまた文学史の必然的前提として現れるものである。これも同様に, 種類的解釈の産物であるので (原著 249 頁を見よ), 種類的解釈はすべての解釈の支配的な中心点と見なされなければならない。しかし同時に, いたるところで歴史的解釈が前提されるので, 言語的記念物そのものの解釈は, たしかにそれ自体それによって生み出される 3 つの現実的諸学問〔文法学, 文学史, および学問史〕なしには可能ではないが, それは爾余の歴史的記念物による補完を必要とする。これらの歴史的記念物においては, 文法的解釈を除いて言語的記念物におけるのと同じ種類の解釈が使用される。ライヒャルト (『文献学の区分』, 26 頁) は, 解釈学と批判についてのわたしの区分に関して, 文法的解釈があまりにも狭く捉えられている, と非難している。すなわち, わたしによって措定された解釈の種類はあらゆる記念物に対して妥当すべきであるので, 彼の見方によれば, 非文字的な記念碑における言語的要素に対応するものをも, 言語的要素のほ

Gyldendal, 1892-).

かに包括する他の解釈が、文法的解釈の代わりに措定されなければならない。しかしながら、このような記念物においては言語的要素に対応するのはまったく見出されないの、そのような解釈は存在しない。あらゆる芸術作品あるいは産業の所産において、およびあらゆる実践的行動の表現において、人間精神が作り出したいろいろな外的形式は、みずから言葉に変換されることのできる、ということはすなわち、書き記されることのできる、客観的直観であるが、これに対して文法的な言語的要素においては、言葉は直観へと遡源されるべきである（原著 78 頁を見よ）。しかし言語の客観的直観がふたたび理念の表現——そこにおいては種類の解釈がこれを証明しなければならない——に利用されるように、人間的産物の目的と意義とを突きとめ、そこからそれらの素材と形式を解釈する種類の解釈が、あらゆる記念物に対して存在する。そしてそれに言語的記念物におけるのと同じ意味で、歴史的解釈と個人的解釈とが付け加わる。後者に最も隣接しているのは芸術作品であるが、それはそのなかで理論的な理念が具現化されているからである。芸術作品の解釈から、文字作品のなかに含まれている伝承の助けを借りて、芸術史が生まれる。しかし芸術的記念物の主要部分は実践的な行動である。それゆえ、芸術史は実践的な行動そのものがその全体性において解釈の対象となるということを前提する。そして古代民族の行動はわれわれにはもはや直接的には存在しないので、その行動の保存されている直接的ないろいろな作用のほかに、まさにまた芸術の記念物と、とりわけ言語的記念物が、その内容にしたがって国家生活と個人生活の歴史の資料となる。この際に、および芸術史を作り出す際に、批判は文法学、文学史、および学問史を作り出す際と同じ意義を有している。究極的目標は、あらゆる人間的作品をその目的、根底にある理念にしたがって測定するという種類の批判の課題である。そしてこれによって、文献学は認識されたものの認識であるというわれわれの解釈（とくに原著 55-56 頁を見よ）の正しさが実証される。ところで、実践的な行動に対する最高の理想は人倫性の理想である。そして人倫的批判はすべての行動がこの理想にしたがって検査されるという点に存する。しかし芸術の最高の理想は

美であり、これこそはあらゆる美的批判の基準である。この二つの理念は真理の理念と共通の根源を人間性の理念のうちにもっている。純人間的なものは地上における神的なものである。学問史において真理の認識が進展するように、すべての文化史において行為を力づける人間性の認識が進展する。それゆえ、もし批判の最高の課題が、国民あるいは時代のあらゆる歴史的生活を、人間性の理想にしたがって測定する点に存ずるとしても、人間性の理想はまた所与のものとして前提されてはならないのであって、むしろ発展そのものから獲得されなければならない。古代の考察にあたっては、このことはただ次のような仕方でのみ起こり得る。すなわち、ひとがみずからのあらゆる産物の全体性を形式的小および内容的な観点で総括し、そしてその妥当性を人類の発展の物差しで規定することによってである。これによって、古代から生まれる近代との相違において、古代のものの見方が成立する。文献学者はそのようにして、解釈学に基礎づけられた批判的操作を総括することによって、みずからの学問の最高の点に聳え立つのである。解釈学はここから批判に奉仕するものとなり、現実的諸学問の体系を生み出す。というのは、解釈学はもはや個々の作品をではなく、民族の生活そのものを解釈し、またそこにおいて古代の性格を証明しようと努めるからである。

それぞれの民族のあらゆる精神的作用の総括としての民族の認識は、そのすべての外的な、つまりは身体的諸器官によって媒介された活動において表現され、そしていまや個々の作品と同じく、歴史的、個人的、種類的、およびその最高の段階では文法的に解釈されるべきである。この場合には歴史的解釈が土台を形成しなければならないが、それは歴史的解釈が民族の認識を外的な現実の諸条件との関連において解釈しなければならないからであり（原著 83 頁を見よ）、これによってそれぞれの民族に人類の歴史における然るべき位置が指定されるからである。民族の認識にまつわるこのような歴史的側面は、あらゆる歴史がそこから出発する国家生活において客観化される。それゆえ、国家生活の叙述は狭い意味における歴史として表示される（原著 11 頁を見よ）。しかし公共生活において作用する力は

個々人であり、そして民族の認識にまつわる個人的側面はその表現を私生活にもっており、そして大きな人倫的共同体の内部における私生活において、純粋に人間的なものは個別に発展する。そのようにして浮かび上がるすべての指導的理念は、そのうち芸術において客観化されるので、芸術が民族の認識の美的な、つまりは種類のな解釈の対象である。しかし同時に、精神がすべてのこうした認識をそれによって作るところの形式、すなわちロゴス（λόγος）もまた、言語において客観化される。言語において認識のすべての素材がまず知識の内容となる。個人性の作用する力によって、その内容はさらに合目的に精神的形式にはめ込まれる。そこから文学的ジャンルが成立し、そして文学的ジャンルの基準にしたがって、言語において表現された形式そのものが、その民族のなかでますます明瞭な意識をもって形成される。したがって、学問史、文学史、および言語史は、概念にしたがって上昇する3つの段階における国民の知識を表している（原著62-63頁を見よ）。これにしたがえば、古代学の現実的な諸学科は、それらが個々の記念物を解釈する際に、当然のこととして出発点をなす文法的解釈から生み出されるのとは逆の順序で、古代の原理から、つまり古代の全体的直観から帰結する。これによって、文献学のすべての形式的小および実質的な諸学科は、言語がアルファとオメガを形づくることによって、1つの円環につなが合わされる。そして実際、古代生活の何らかの側面を把握できるためには、研究はたえずこの円環全体を走り抜かなければならない。国家生活においては、私的関心、芸術、そして学問が一緒に作用している。私生活はその他のすべての範囲を個人性の領域へと引っ張っていく。学問は芸術においてあり、また芸術は学問においてある。要するに、いたるところで個は全体の連関のうちでのみ把握され得る。しかしそれぞれの現実的諸学科にとっての批判的基準は、またつねにその固有の発展から取り出されるべきであるので、ひとはそれぞれにおいて古代をただ近代との関係においてのみ正しく認識することができる（原著66頁を見よ）。

さて、もし古代がそのような仕方でも再構成されるとすれば、そこから大がかりな、時代の先入見を超え出た、神的小および人間的な事柄についての

見方が成立しなければならない。というのは、数千年の最も高貴な産物と、無数の精神によって作られた理念の多面的な展開が、われわれにおいて再生産されるからである。このことはあらゆる純粋な感情に力強い作用を及ぼす。そしてこの点に、若者が学校で文献学的に陶冶されるべき主たる理由も、やはり存在しているのである。精神一般は言語によって訓練され、しかもそれは数学によってとは異なる仕方においてである。というのは、数学においては厳格な必然性が支配しているので、それによって必然的なものに対する感覚と理解とが進展させられる。それに対して言語においては、自由が優勢であり、それゆえ言語の研究によって、若者は自由な学問的および詩的・芸術的發展へと導かれるのである。古代の言語においては、このことは最も完全な、あらゆる時代によって古典的と認知された模範によって生起する。しかし同時に、生徒たちにおいて段階的に、そして彼らの理解力が成長するのに対応して、古代の最良の作品の再生産によって、純人間的なもののそれ自体において完結した一定の形式が、精神的に再び生み出される。この純人間的なものは、古代の最良の作品のなかに反映されており、そしてわれわれの周りに殺到する近代的産物の混乱よりも純粋に、そこからわれわれに語りかけてくる。その場合、人倫的な批判はその最初の基本的要素においておのずから形成されるので、アリストテレスにしたがえば、悲劇が魂を情熱から純化するような意味で、感情の精神的な高揚と純化とが成立する。そしてまさしく古代の悲劇は、その再生産を通じて、あの高揚を最も直接的に惹き起こすのである。にもかかわらず、もしひとが文献学の学問的営みを学校に転用すれば、全作用はしくじったものとなる。学校ではすべてのものが初等的でなければならない。古代の再生産は、多かれ少なかれ明瞭な意識で読みかつ解釈することによって追構成される、個々の文字作品を手掛かりにしてのみ、いわば思わず知らず達成されるのである。古文書学的批判と校訂的批判は決して学校には属していない。それゆえ、古代学の現実的諸学科はそこでは学問的あるいは体系的に提示されることができない。その理由は、このためにはみっちり鍛えられた文献学的技術が必要だからである。

しかしまた学問的な文献学は、個々の記念物の解釈と批判に基づいてのみ、現実的な諸学問を築くことができるのであって、アプリアリな思弁によってではない。文献学的諸機能のなかでは方法の普遍的側面のみが哲学的である。すなわち、それによってのみ個々のものの全体を理性的および直観的な順序で説明することが可能となるところの、正しい配列と概念的発展、そして個々のものから普遍的概念を導き出す技法である。というのは、普遍的概念は経験から抽出されたものではなく、すでに経験の基礎に存しているからである。2つの事柄が等しいか等しくないかは、経験が教える。しかし「等しい」とか「等しくない」という概念は、経験から導き出すことはできず、それらはひとがそれを経験によって事物に即して認識すべきであるときに、すでに精神のなかになければならない。さらに、歴史のなかで浮かび上がってくる理念を、少なくとも素質にしたがってもっていない人は、それをまた素材のうちに見出すことができないであろう（原著 17 頁を見よ）。ところで、哲学は普遍的概念の助けを借りて、神的なもの、人倫的に善なるもの、美的なもの、真なるものをそれ自体として、それらの永遠的な内実にしたがって認識しようとするので、古代的なものもまた、それらの絶対的な妥当性の概念における理念によって測定され、そしてしかるのち宗教哲学、歴史哲学、芸術哲学、および言語哲学の対象となる。これらは、われわれが文献学的分析によって倫理学から実質的学問分野を暫定的に導き出したとき（原著 58 頁を見よ）確証したように、その結果において文献学的判読による校訂と一致しなければならない。